

# 第7回

# 全国同人雑誌最優秀賞

# まほろば賞

# 決定

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第七回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」は、今年から、公開選考会の形式を、選考委員による選考会に変えて、二〇一三年八月九日金曜日（東京都大田区民プラザ）において行なわれました。選考委員三田誠広氏、中上紀氏、八覚正大氏、それに五十嵐勉「文芸思潮」編集長の熱い議論によって以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また本年より、読者賞を設け、全国からの読者の投票と寄付により、別な形での表彰と賞揚も行なうことにいたしました。その投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただきます。また特別賞と五十嵐勉賞には賞状と賞金五万

円・記念トロフィーを、また優秀賞には賞状と賞金一万円・記念メダルを贈らせていただきます。

今回もどれも力のこもった充実した作品で、同人雑誌の豊かな創作力を見ることができました。

今後とも全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。次回第八回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇一三年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

また、どうぞ推薦や投票にも多数の方が御参加くださり、皆様自らの手で同人雑誌の優秀作品を選び育てていただきたいと思います。

全国の同人雑誌諸氏の熱い支持を心からお願ひする次第です。

## 特別賞

### 「花の星座」

『札幌文学』76号

小南武朗

### 五十嵐勉賞

### 「夜の足音」

『パリ、サンドニ通り二四九』

麻井さほ

### 「のぞみ」

『私人』74号

尾崎美和

## 優秀賞

### 「謎を明かす女」

『長崎文学』71号

向井十郎

### 「黄金蝶事件」

『長崎文学』71号

江口 宣

### 「息子の隠れ家」

『月水金』36号

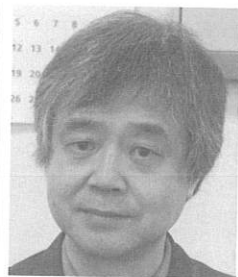
榎本武男



## 第7回全国同人雑誌最優秀賞

# まほろば賞

まほろば賞賞金は、夏目日美子氏、原石寛氏、木内是壽氏、山口馨氏などの御寄付によるものです。ここに深く御礼申し上げます。また「群系」「風の森」「安芸文学」「彩雲」「海」「狐火」「べん」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ  
1948 大阪生まれ  
早稲田大学文学部卒  
77「僕って何」で芥川賞受賞  
作品はほかに「いちご同盟」  
「空海」など  
日本文藝家協会副理事長  
日本ペンクラブ理事  
著作権情報センター理事  
日本点字図書館理事  
武蔵野大学文学部教授

## 完成度は高い

### 三田誠広

同人誌の書き手はキャリアの長い人が多い。高校野球に近い芥川賞とはレベルが違う。しかし逆に完成度を意識するあまり、文学の世界に新しい波を立てようという意欲を感じられなかった。同人間での批評にさらされるうちに可能性を摘み取られるのではという危惧がないわけではない。それでも安定したレベルの作品を読むのは楽しい作業だった。

小南武朗『花の星座』は、はかない風情の女、日本舞踊、古寺と山桜という、日本の美をちりばめた佳品で完成度は高い。主人公の足もとがちゃんと書かれていないのは、耽美のために雑念を排除したためで、作者の強い美意識に支えられた意図的な構成だと感じた。珠玉の作品とはこのこ

のか、あまりにも素朴な書きぶり、小説としてのふくらみには乏しかった。この作品は舞台が長崎でなければ成立しない内容になっていて、被曝という重い事実が読者の胸を打つ。震災による原発のメルtdownという第三の被曝を体験した日本人にとっては見過ごすことのできない作品である。

麻井さほ『夜の足音』も同様にエッセー風に切り詰められた作品で、生い立ちに関わるトラウマという設定には重みを感じられたが、小説としてはもっと書き込んでほしい。とくにヒロインの描く絵が作品の重要なポイントとなっているので、絵を描くことの苦労やどのようにして作品が完成していくのかといった過程と、そこに関わっているヒロインの苦悩を描いてもらいたい。エッセーとしての完成度の高さは認めるものの、このままではいくぶんセンチメンタルなモノログという段階にとどまってしまふ。

江口宣『黄金蝶事件』は口あたりのよいライトノベル的な文体で、三姉妹の活躍を中心に黄金蝶をめぐる謎が次々と展開される。最初からリアリティーを欠いたファンタジーだが、終盤に行くにつれてファンタジーのスケールが大きくなって、宇宙論的なものすごいイメージが提出される。この黄金蝶の輝きにも、根底には長崎の被爆体験が秘められていると深読みすると、文学作品としてもレベルが高いと感じられるのだが、あまりにも美しくまとめられて

とだろう。わたしとしては文句のつけようがなかった。ただしこの作品は中間小説の佳品というべきで、純文学的な視点から見れば、美を追い求めるこの主人公の出自や、家庭生活や、仕事のことなどが、きれいに隠蔽されている点に気がなるだろう。しかし川端康成の『伊豆の踊子』は踊子が描かれているだけで主人公の学生が一人旅に出ている理由は何も書かれていない。文学というものはそれでいいのだ。

尾崎美和『のぞみ』は有価証券の売買を仕事とする有能な女が、孤独感に駆られて少女を自宅に引き入れる話で、きわめて野心的で文学的な問題提起をはらんでいる。坪内逍遙が小説の原理として提出した「世相と人情」がきつちりと押さえられていて、現代社会の歪みのような場所所棲息する中年女の実在感に手応えを覚えた。わたしの不満はこのきわめて現代的な仕事の内容をもう少し具体的に書いてくれないと、図式的で通俗的な設定だと感じられてしまうという点に尽きる。こういう部分をいねいに心をこめて書けば、より完成度が高くなると思える。しかし他の選考委員の強い支持があつて、この作品の受賞に賛成することになった。

向井十郎『謎を明かす女』はエッセー的な書き方でリアリティーがあり最後に謎が解き明かされる展開もそれなりに面白かったが、本当らしさを出すための意図的な手法な

いるために、ドキッとしないものがないようにも思えた。  
榎本武男『息子の隠れ家』は心配性の女の、子育ての苦労の話と思ひ、いささか引き気味に読み進むうちに、作者の意図の深さに思い到ることになった。仕事一途の夫と、孤独を感じる妻、壊れた家庭の中で夢にすがろうとする子どもという、現代的な図式の世界が、認知症という設定になつている老婆の出現によって、にわかには不思議な領域に読者を誘い込んでいく。現代的なテーマと見えたものが最終的には「遠野物語」の世界にも通じる幻想的なイメージにつながっていく。難を言えばこうした仕掛けを前半から暗示させるようなところがあると、作品にスリルが出てくるのではないかと感じた。

## 早稲田1968

団塊の世代に生まれて



三田誠広

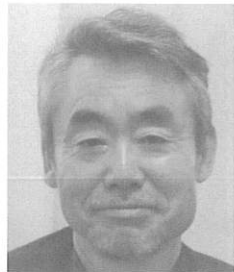
村上春樹も立松和平も  
学生だった  
団塊世代が忘れられない  
あの時代、あの季節

大学闘争、バリケード、  
ゴーゴー喫茶、ビールズ……

廣済堂新書







はっかく まさひろ

1952 東京生まれ  
早大理工学部 数学科・都  
立大仏文科卒  
92「十二階」で新潮新人  
賞受賞  
小説「零度の遊び」「イエ  
ロークスター」「父の  
フレーム」「カウンター」  
ルポ『夜光の時計』  
詩集『朝一の獲物』  
精神対話士

## まほろば賞の再スタート

### 八覚正大

選考委員四人でのまほろば賞が再スタートした。最終選考作品は六作。しぼるのはなかなか編集部のご苦労があったと思うが、水面上に出た六本の華にさわりつつ、どれを活けようかという気持ちだった。選考の二週間ほど前に一度読み、そして直前にまた読みなおした。その時の評価はほとんど変わらず選考会に臨んだ。

「選考「会」はやはり必要であった。選考委員といえども、気づかなかった面を他の選考委員の読みから気づき直す——という変容がある。それは強く主張する委員がいたからとか、みな言うことにしたが……という姿勢とは、まったく異なるもの、「気づかせられる」というものである。私が読み落としていたのは、「黄金蝶事件」における作

混ざり合っているようで、像を結び得なかった。夜なのか、黒なのか、海なのか、青なのか、生なのか、死なのか……重いテーマの作品だけに、明確化とさらなる書き込みによる重厚さをのぞみたい。

「花の星座」は、よく書けた作品である。桜、日本舞踏、父親の孤高な旅と死、蝶と脱皮、野火、寺の炎上、火の星……など耽美的なそれぞれのシーンがよく描かれていて読ませるのだが、全体として何を言いたいのかが突き抜けず、また暗い世界の象徴のような「山」のことが、どこか中途半端なままの気がした。

「黄金蝶事件」は重いテーマを背負った作者が、人生を生き抜いてきたその先に感じる大自然への昇華された解放の感覚、とでもいうものをメルヘン的に描いている。それは評価したい。ただ長すぎるくらいがあり、聞く側が腰を据えないと、飽きてしまう気もする。作者は次世代の子どもたちに「あのこと」を明るく聞かせたい思いをもったのだろう……書く意味は大いにあったと思うが。

「謎を明かす女」も原爆の後遺症ゆえに、愛する者から去った……という女の理由が明かされるが、逆に主人公「彼」が当時なせもつと真剣に去った女を追わなかったのか。再会して問いなおすのも、どこか質問調、そのあたりが物足りなかった。

「息子の隠れ家」は分かりにくいだが、たしかによく計算さ

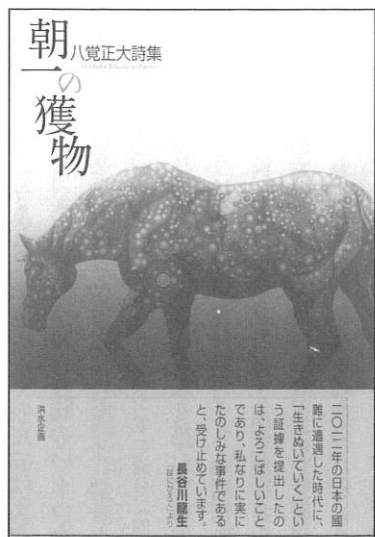
者、そして同人誌の当地における原爆の過去とその大きな意味であった。また、「息子の隠れ家」における主人公の母親の狂気が進んでいく孤立と幻想的世界への緻密な計算だった。

そのような選考会での変化を告白した上で、やはり受賞作は「のぞみ」だと思った。ネコをペットとする現代の癒しの感覚を一步進め、少女を「飼う」という状況設定と、その中で少女の首に感じた匂いの《生温かい母親の体温そのもののような匂い》によって、主人公の女性は存在の居場所を得た——と言っても過言ではない。金融という、数字の虚構の世界で生きる主人公の女性にとって、棺桶のようなマンションに帰っての唯一の命の感触、それが「のぞみ」という少女を飼うことであり、その少女はまさにネコのように、自由な意志を行使して去ったあと、またもどってきたのだ。発想、感覚、展開、着地……手ごたえのふんだんにある光る作品だ。

一方「夜の足音」は、自死した母親をもつ絵描きの女性と、ナチスに捕えられたユダヤ人の母を持つ国際政治学者の女性との、レズビアンともとれる交情が描かれている。前記の作品の現代社会の抑圧に比して、この作品は歴史的事実や悲惨な理由が明確にされた上での、『海』というテーマの絵画作品への両登場人物の思い入れが濃厚だ。が、画の描かれるプロセスが足りず、また様々な色彩がどこか

れた作品と分かってきた。作者の人生がどの程度投影されているのか——実は、中国に行っていて妻を孤立させた夫こそ、作者の分身ではなかったのか……それを知りたい気もしたが、作者はすでに他界されているとのことだった。

今回、選考会が、好感の持った作品を推すだけではなく、理解を進め深め合う場となったことを好ましく感じている。それは知り合いだからとか、仲間を義理人情で引き立てるとか、の日本の小社会の感覚とは、もちろん違っていたと私は思う。新しい試みを求める文学の魂が、案外そんなところに、ひょいっと足を置いて立って見せるのではないか、そんな気もする。まほろば賞の再生に立ち会えたことを誇りに思うしだいである。







いがらし つとむ

## 作品の生命力

### 五十嵐勉

作品を読むとき、私が最も評価したいのは、言葉に込められた力である。詩でも、エッセイでも、小説でも、言葉や文章の流れの底に込められた思いの強さによって、作品の刻印が彫られる。胸に伝わってくる深いものがどれだけあるか、その切迫性が最終的には作品の生命力を決める。言葉に込められた筆者の思いは、他者の心に刻み込まれ、生き続ける。共感が別な個人の中でもう一つの力となって新たな生命を産み出す。そこに文学の真の価値があるのであって、言葉が奥底まで響き合えば響き合うほど、その作品は、共鳴の芯が深く、したがって長い時間を経ても残るものになる。そこに祈りや痛切な叫びが入れば、魂の領域にまで踏み込んでいくことになるだろう。

しつかり切り取っている手応えを覚える。胸への刻印の深さにおいて、これを第一に推した。

二作受賞でもいいと思つたのは、尾崎美和氏の「のぞみ」である。この作品は、現代の国際金融という世界で生きる女性の抽象感覚を見事に書き表している。欲望の伴つた数字が無数に飛び交い、0の羅列と交差によって、狂おしく入り乱れる現代の一面がそこにある。しかし現実包にそれによって命を失い、倒産や破産の悲劇を内包している殺伐とした世界をも下部に抱えた表裏の分裂的な現象が、実生活の感覚を遊離させていく。日常として目に映る現実が「車窓を流れていく」希薄なものとしての移ろいを深めていく。数字の暴風のなかで損なわれ失われていく生活実感は、少女との閉ざされた生活の匂いの中でかろうじて保たれている。この危うさの中に花開く世界が「のぞみ」の世界なのだ。「棺桶」の空中楼閣の上でかろうじてかすかに揺れて開いている水中花のような生は、現代の欲望の数字の氾濫の海に危うく咲く幻花でもある。この作品は都市を見下ろしている。そして一方で現代都市という砂漠の内臓によく触れている。少女のかすかな匂いだけに繋ぎ止められた、荒唐と狂乱からの「逃れ」が、はかなくそこに託されている。この作品はいま世界中を駆け巡ってイナゴの大群のように冨を食い漁っているある数字の狂乱に触れている点、また少女狩りのような切断された関係を新しい素材として

今期の芥川賞作品「爪と目」など、その点ではまったく胸に残るものはなく、ここにある同人雑誌のいくつかの作品の方がはるかに文学の内質を備えていた。

特に麻井さほ氏の「夜の足音」パリ、サンドニ通り二四九一」は、フランス・パリの貧民街に住んで絵を描く女性の孤独な軌跡が、同じように過去の傷を持つスイス人女性との内面の呼び合いを軸にし、癒し合おうとする存在がよく彫りこまれている。過去の傷を深く負った者どうしの旋律が奥底に低く響いている。靴音があたかも運命の音のように胸に届いてきて、消えることがない。それは運命の傷を引き摺って歩き進んでいく人間の姿の永遠の靴音のように聞こえてくる。ここにこの作品の、時の流れによっても褪せない真の輝きがある。パリの貧しい裏面をこのように描き出した側面も評価できるし、ナチス・ドイツの残酷な歴史を女性の肉体を通して表現し得ているそのアプローチも、ヨーロッパに滞在した者でなければ書けない鋭い角度を備えている。イスラエルへ行くという新たな使命と運命を背負ったアナベルの別離は、金銭では超えられないもつと大きな運命の表現としてそこに存在している。死を覚悟した別離に、金銭を含む最大限を遺すことは、自然だろう。文章は面として繋がっていく散文の量性を欠いているが、逆に寸断されて点や線によって進められていく間歌性の強い文章は、詩的な奥行きを付帯している。短くても、何かを

提示している点、コンクリート建物や地下鉄など都市機能の持つ無機質性をしつかり表現し得ている点など、発展や深化を期待できるいくつもの領域を持つている。現代に切り込むことができる作品として、今後を期待できる。

特別賞となつた小南武朗氏の「花の星座」は、古典的な落ち着き保持した作品である。オーソドックスなスタイルに乗せられた舞台世界は、周子という日本舞踊の踊り手によって、止揚される。それは母の子に託す日本舞踊への思い、さらに父の桜の植樹や寺の終焉が重ねられて、最後に山火事によって夜空へ立ち昇っていく。壮大な架け橋となつて夜空を彩るシーンは、滅びと新生が同時に立ち上がる、大きな構図のクライマックスを見せている。このスケールの大きさは何か特に強い思いがなければ構築できないもので、その秘密は作品からのみ推し量ることはできないが、星座と花との融合に美しい橋立てを感じることができ。筆者の内的な燃焼感に、この作品に賭けた思いがよく伝わってきて、何か賞に値する作品であることは実感した。ただ、「……」などを多く使わずに、余韻に頼りすぎない点がある点、本にするようなときは、修正してほしい。

江口宣氏の「黄金蝶事件」は、SFの領域と推理小説の領域にまたがる斬新な発想で、宇宙へ飛び立つ生命の姿に触れた、珍しい作品である。ユーモラスな人物たちとその

描写はおもしろく楽しめるが、時に楽しむ方が優先してしまつて、そちらに流され、テーマへの肉薄がやや手薄になつてしまつた点が惜しまれる。ここまで新奇な領域を描き、宇宙からの生命というを描くのなら、最も知りたい、宇宙にとつて生命とは何か、その本質的な問いかけにもつと迫つてほしかった。もしそれに答える形で最後が描かれれば、深淵を覗くようなすこいものにもなり得たかもしれない。また黄金蝶の光が、反射による光なのか、自らの発光なのか、あるいはそのどちらでもないもつと特殊な光なのか、区別が曖昧な点もテーマの弱さに結びついたかもしれない。ユニークな発想だけに、惜しまれる作品である。

今回の優秀作のなかで最も短い向井十郎氏の「謎を明かす女」は、戦後半世紀を経て再会した女性への、自分と別れたときの長い間の疑問を解き明かす筋立てになつていて五十年という時間は、すでに死に近い人生の終焉に立つたとき、様々な記憶の模様が入り乱れて、時間距離を錯綜させる。そのおぼろさの上に乗つて、突如その別離の原因が原爆の遺伝への恐怖という告白で現れる。そのインパクトが記憶の厚い雲を突き抜けてなお鮮烈に迫ってくるところに、この作品の短編小説としての成立がある。ロシア人の混血という血筋や長崎という歴史の街の舞台、そして原爆という過去がうまく溶け合つて、この地でなければ醸し出せない色を帯びさせている。鮮やかな一閃を想わせる好短

## まほろば賞 受賞の言葉 尾崎美和

第7回まほろば賞。私の作品が、このようなすばらしい賞をいただけることになるとは思つてもいませんでした。感謝してもしきれない思いです。

受賞を知ったとき思ったのは、「ああ、つながつた」ということです。そのときの私の足元には、腹ばいの八ヶ月の長男がいて、泣き出そうか出すまいか首をかき上げて考えているようでした。まさにこの彼の月齢の分、私は、これまでの私の世界から切り離されて、まったく違う世界に足を踏み入れていたのです。新しい世界は、身構えていたほど悪くはなかったのですが、それでもときどきチクリと胸を刺される思いがします。原因はただひとつ。一文字も創作をしないからなのでした。今回の受賞は、その「チクリ」をすっかり忘れさせてくれました。そればかりか、作品を読んでいただける幸せ、評価をいただけるありがたさ、さらに認めていただいた喜び——切り離された世界に置いてきてしまつた感情が一気によみがえり、胸がいっぱいになったのです。

また創作をしていこう。時間のやりくりがどうも大変そうだけれども、少しずつ書いていこう。そう思える大きな

篇として胸に残つた。

榎本武男氏の「息子の隠れ家」は、技巧的な作品で、生活の中でのもう一つの別な空間の存在が不思議なリアリティで醸し出されており、それが現代の満たされない空白の存在を象徴している点は興味を覚えたが、人物のリアリティが現実の世界になく、何か別の世界にすでに行つていような置き去りにされた感覚が馴染めなかった。

同人雑誌の作品の中には、衰退しつつある大手出版社の文芸誌の作品よりもはるかに内質の豊かな作品、現代を切り取っている作品が少なからずある。豊かな水脈というべきこれに光を当てて、文芸創作の真のエネルギーを鼓舞していくことは、今後もまほろば賞の重要な役割であるだろう。次回も期待したい。



後押しをいただきました。本当にありがとうございました。また、こうしてこのような賞をいただけるのも、「私人」との出合いがあったからです。この場をお借りして、尾高修也先生と同人の皆さんにもお礼を言わせてください。二年前、温かく迎え入れていただきありがとうございました。これからしばらくは、長男の寝顔を探り見しながらこそこそとパソコンに向かうことになるのですが、この制約がなにか新しい発想の素となることを信じていると思います。



尾崎美和

おざき みわ

1976 三重県生まれ  
99 神戸大学文学部卒業  
生活情報誌制作会社勤務  
2008 年から浦安市在住  
11年秋に朝日カルチャーセンターにて「小説作法」受講  
「私人」同人主婦



# 特別賞

## 受賞の言葉

### 小南武朗

「花の星座」受賞の連絡を受けたとき、嬉しかった。長いこと夢に見ていたある素材が、一つのかたちを得て認められたことが嬉しかった。

「夜空に煌めきながら天の川が流れていくように、爛漫と咲き誇る桜並木がつくり出す花の星座を創りたい」若い造園師のそんな話を読みながら、小説を思い浮かべていた。長い冬が終わって桜前線の北上が話題になる頃、札幌の桜は漸く蕾を膨らませる。咲き始めるのは五月はじめの頃だ。白一面の冬の色が、或る日多様な色に変わる。北国の春の不思議だ。咲き誇る桜はやがて一斉に空に散る。花吹雪が風に乗るその姿が、妖艶と無常を誘う。日本舞踊のひとつの世界が見える気がした。静寂の流れのなかに、心の混沌を踊る。動きに一切の無駄は許されない。踊り手の障害の設定が物語の軸となった。終盤、野火が山を焼く。火が空を埋め、長い帯となり、瞬く星に見える。北国の春、白の世界が一変するように、煌めく星が花のように夜空に広がる。そんな夢に咲く、花の星座を書きたかった。

# 五十嵐勉賞

## 受賞の言葉 麻井さほ

このたびは五十嵐勉賞を賜り、ありがとうございました。私は詩、絵画、評論などの表現をしてきましたが、一番力を入れたかったのが小説でした。

三〇代に父の会社の倒産、一家離散、母の死などいろいろなことがあり、生活や仕事に追われ、創作にかける時間やエネルギーが思うようにとれませんでした。

同人雑誌『婦人文芸』84号に載せた「夜の足音」パリ、サンドニ通り二四九」を五十嵐勉編集長が『文芸思潮』の同人雑誌で論評して下さいました。パリでの二人の女性の出会いを核にもう少し掘り下げるように、との改良点も指摘され、手直しすることを勧められました。なかなか強けなかったのですが、その後も編集長は、厳しく辛抱強くこの小説を「掘り下げること」について励まし、待つて下さいました。このたび文字通りそれを銘打った賞を戴き、感謝いたします。またさらに「文芸思潮」の読者の方々から大きな御支持をいただき、私にとっては二重の深い喜びです。今後はこれを励みに今まで書き散らしてきたものを纏めるようにしていきたいと思えます。



小南武朗

こみなみ たけろう

1927年生まれ  
北海道大学卒  
北海道放送入社 制作部門担当  
1961 昭和36年度芸術祭テレビドラマ部門で、松山善三作『オロロン島の島』芸術祭大賞受賞

63 昭和38年度芸術祭テレビドラマ部門で、安部公房作『虫は死ぬ』芸術祭奨励賞受賞ほか  
単行本に、小説集『ぬばたま』、随筆集『自分にとっての美しい日本語』など  
舞台活動に、創作パレエ、創作舞踊など多数  
同人誌「弦」「北方文芸」などに参加  
現在「札幌文学」同人



麻井さほ

あさい さほ

1943 東京深川生まれ  
慶応義塾大学文学部 哲学科美学美術史学卒業  
武蔵野美術大学油絵専攻卒業  
横浜国立大学環境情報学府修士課程終了 大学非常勤講師  
詩集『喉』他 詩人名／渡辺みえこ  
『女ひとり漂泊のインド 恵みの岸辺ヴァーラーナシー』（彩流社）『女のいない死の楽園—供儀の身体・三島由紀夫』（バンドラカンパニー／第1回女性文化賞受賞）『語り得ぬもの—一村上春樹の女性表象』（御茶の水書房）  
『婦人文芸』誌友

## 婦人文芸



2007・12 84号



	花の星座	のぞみ	謎を明かす女	黄金蝶事件	夜の足音	息子の隠れ家
今田真理子	10	10	5	5	8	12
ゴルビー長田			10			
菅原治子					20	
和田信子		10				
山口薫		40			10	
秋本喜久子	1	2	1	1	4	1
木内是壽					150	
小沢美智恵					20	
長野統		19				1
志津谷元子	1	2	1		4	2
合計 / 350点	12	83	17	6	216	16

第7回まほろば賞は、新たに読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ることといたしました。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額 53000円を得票率の割合で比例配分し、100円未満は切り上げで各著者に記念品とともに贈らせていただきます。お寄せ下さる方はまだ少数ですが、これが大きく発展し、多数の方が参加して下さいることを期待しております。

全国同人雑誌振興会

● 寸評・感想 ●

● 「夜の足音」は上質のテレビドラマを観ているようなすばらしい作品です。 木内是壽

● 「夜の足音」は少し説明不足のところはあるけれど、文学の香りのする魅力ある作品でした。 小沢美智恵

● 「花の星座」作品を創る経験を積んだ方という印象を持ちましたが、いささか情報過多（あるいはそれによりかかり過ぎ）の気味があり、切れ味がいま一つという感じでした。「のぞみ」異色の内容であり、文体も感じ、文学の森に分け入っていく、との感慨を抱かせる作品になっていると思います。

「謎を明かす女」長崎の悲劇を追想し、かの町の情趣を感じさせる作品ですが、説明の多さもつれがマイナスと なっているようです。

「黄金蝶事件」相当の書き手でいらっしやいます。表現に 澁みがなく、「科学的夢幻(?)」の世界に読者を連れ出して くれます。しかしながら、気持ちに残るものをもたらし してくれません。別のテーマを追っていた方がいいです。「夜の足音」生い立ちの暗さ、同性間の交情、パリという 都市の魅力。小説の材料としては揃っており、リリズムを 感じます。ただ、挿入された酷い話があまりに重く、文 脈を損ねているように思います。

新しい日本文学の潮流を

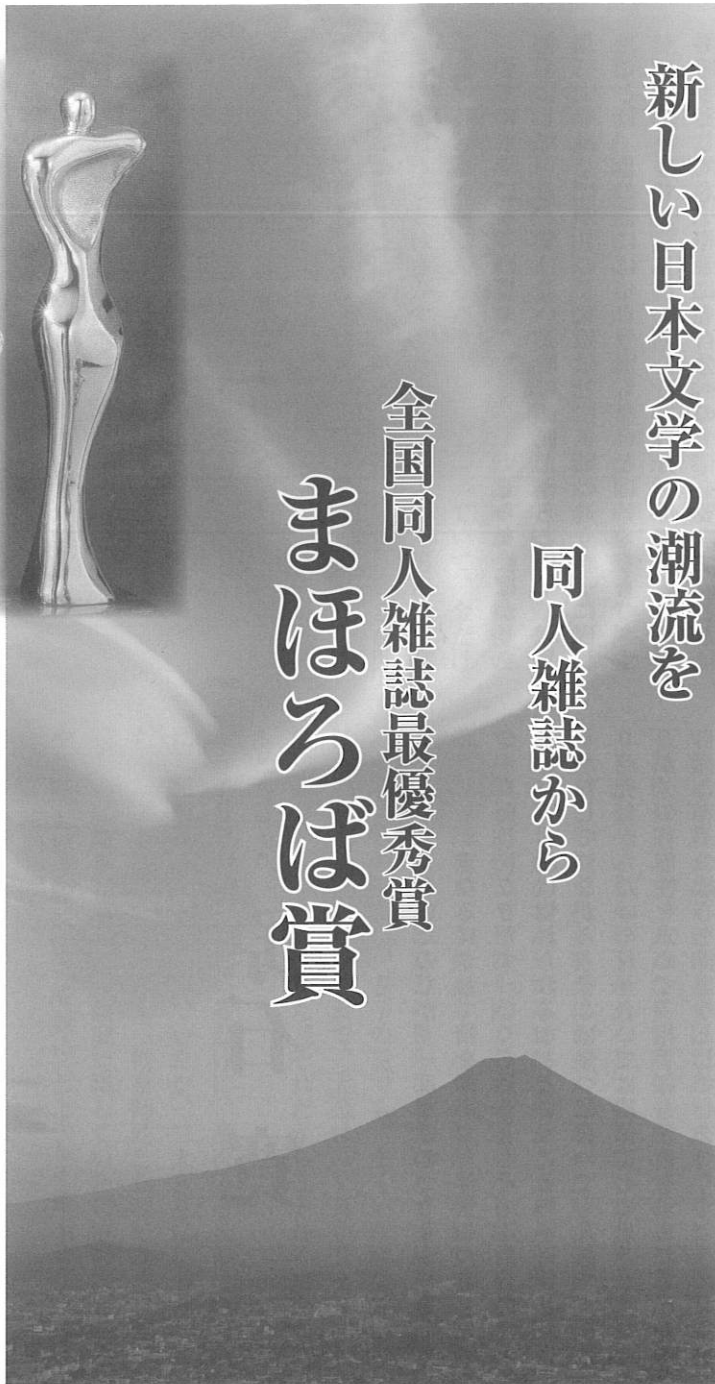
同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「息子の隠れ家」文章がやたらとどしく、息子の思いつ きも母親の混乱も充分には伝えられていないように思います。 結論として、新たな文学シーンを感じさせてくれ、か つ今後に期待が持てる（磨く価値を多く有していらっしや る）作家は、尾崎美和氏ではないかと感じた次第です。

山口 馨



第6回  
全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

2012 公開選考会

9月17日月祝 PM1時30分

あなたも選考委員

同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう  
同人雑誌界のエポックを

会場●東京都大田区民プラザ

主催●全国同人雑誌振興会・文芸思潮

後援●作家集団「塊」 参加費●2000円

●文書選考委員（送付参加）1000円

（候補作品を読んでいただくことが必要です／収益は「まほろば賞」の賞金となります）

※候補作6作は「文芸思潮」46号に掲載

参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮

メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp

地方から御参加の方は、宿舎も手します

詳細は次ページを御覧下さい。

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

# 第6回全国同人雑誌最優秀賞

## まほろば賞

どうぞ選考に御参加ください **公開選考会**

あなたも選ぶ、新同人雑誌時代の、新しい文学賞

2012 9月17日月祝 13時半

東京大田区民プラザ

●全国同人雑誌振興会・文芸思潮では全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を公開選考会にて決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。

●候補作品は文芸思潮46号に同人雑誌優秀作として掲載された以下の作品です。

「下北沢路地裏ツアー」(草原克芳「カプリチオ」31号)

「鏡が湖」(市尾卓「季節風」108号)

「黒い赤ちゃん」(波佐間義之「九州文学」539号)

「見返り仏」(若草田ひずる「じゅん文学」70号)

「黒い水」(佐佐木邦子「仙台文学」79号)

「マーサの足音」(紺野夏子「南風」29号)

●選考会は9月17日(月曜日・祝日)に大田区民プラザ第一会議室で13時半より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方はまほろば賞選考委員申込用紙を、「文芸思潮」まほろば賞係宛にお送りください。※参加費2000円(参加費は賞金に充てられます)

選考委員は候補作を全作読むことが資格となります。お持ちでない方は選考委員申込用紙と併せて、文芸思潮に46号を御注文ください。文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいただければそのまま選考委員となることができます。詳しくは次ページをご覧ください。

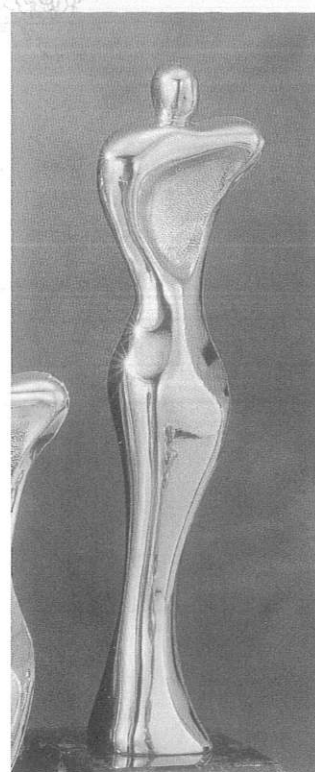
全国同人雑誌振興会

文芸思潮

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL&FAX03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp



新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の公開選考会に参加  
ご希望の方は、以下の用紙をご利用ください。

### 第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞選考委員申込用紙

2012年9月17日(月祝)に東京都大田区民プラザで開催される、第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞の選考に参加します。

ふりがな 氏名	年齢
住所 〒	所属同人誌 (あれば)
TEL	Eメール (あれば)

2012年8月31日までに「文芸思潮」まほろば賞係宛に郵送・FAX等でご提出ください。これは実際に会場での選考に参加される方(一般選考委員)のための申込用紙です。選考に参加される方は、必ず全ての候補作をお読みください。※会場参加費2000円  
会場に出席できない方(文書選考委員)は別頁の投票用紙をご利用ください。



# 全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

## ●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

## ●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから（3年以内とする）優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。候補作は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
  - ② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
  - ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
  - ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
  - ⑤ 各委員投票持ちは特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は当面設けない。
  - ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前までに行い、選考会当日までに開票集計して発表する。
  - ⑦ 最優秀賞は一人が原則とするが、二人もありうる。
  - ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）
  - ⑨ 最優秀賞選考過程・結果を「文芸思潮」に発表する。
  - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日（2012年7月1日改訂）

※文書選考委員の持ち点を3点に戻す。

全国同人雑誌振興会

文芸思潮

# 第6回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞公開選考会

あなたの手で最優秀賞を

参加費 2000円  
文書選考委員 1000円

## ★進行予定

①合議・討議⇒②投票⇒③絞り込み討議⇒④投票⇒⑤集計・決定

※徹底的に話し合った後、投票で候補を絞り込み、討議を重ねて第2回目の投票で決定いたします。

●選考会に出席される方は、前ページを利用しただき、お名前・ご住所・お電話番号を2012年8月31日までに、FAX、メール等でお知らせください。

## ●お問合せ 文芸思潮まほろば賞係

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL & FAX 03-5706-7848

Eメール asiawave@qk9.so-net.ne.jp

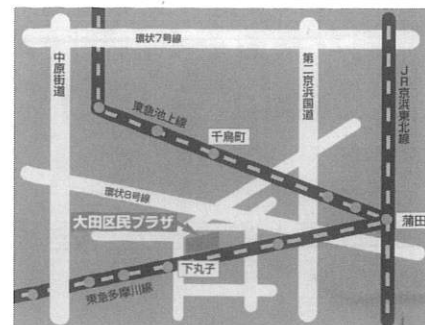
会場 **大田区民プラザ**

東急多摩川線「下丸子」駅前

2012年9月17日（月・祝）

13時半～17時予定

どなたでもご参加いただけます。



## 第6回全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞文書選考委員投票用紙

選考会に参加できない方はこの用紙を切り取って記入し、郵便為替1000円同封の上8月31日までに、まほろば賞係宛てにお送りください。	⑥	紺野夏子 「南風」	29号	点
	⑤	佐佐木邦子 「仙台文学」	79号	点
	④	若草田ひずる 「じゅん文学」	70号	点
	③	波佐間義之 「九州文学」	539号	点
	②	市尾卓 「季節風」	108号	点
	①	草原克芳 「カプリチオ」	31号	点
持ち点 <b>3</b>	氏名		TEL	
住所 〒				

※点数の合計が持ち点となるようにつけてください。一作に限らなくてもけっこうです。126 文書選考委員の方は1000円の郵便為替を同封して下さい。収益は賞金にさせていただきます。

文芸思潮



## 下北沢路地裏ツアー

草原克芳

1

茶沢通りに面した北沢タウンホールのアトリウムを通し  
て、淡い光がフロアを水色に染めている。桜の散ったなご  
りが、まだ道沿いのそこかしこに残っていた。春とはい  
え、すでにいささか蒸し蒸しするほどの暑い陽気であっ  
た。

羽木務は、腕時計を見て、集合予定の二時を少し過ぎた  
ことを確認した。

すぐ向い側のバス停から、のろのろと三軒茶屋方面に、  
バスが走り出す。車体には、春にしては強過ぎる陽が舐め

るように照りつけ、まばゆい光を反射している。

閑散とした広いタウンホールの一階ロビーでは、椅子と  
テーブルが散在していた。若いカップルが黙り込んでコー  
ヒーを啜っている。他にも暇そうな年金生活者ふうの老  
人、買い物籠をかかえこんだまま放心したような顔で休ん  
でいる主婦、仕事を探し疲れてタバコをふかしているとい  
った風情の中年男性などが、所在なげに腰を降ろしてい  
た。

無言で、あるいは小声で囁きながら座っている彼らの足  
元には、青灰色の短い影が落ちていた。

奥の方では、ガラス越しに二、三人の職員がデスクに向

っているのが見える。いかにも日曜の午後の公共施設の退  
屈そうな風景だ。

さつきから羽木務は、いやな予感がしていた。

自販機の前で旗を持って立っている初老の人物が、この  
ツアーの主宰者だろうか。《下北沢路地裏ツアー》と旗に  
書きつけてある。

年の頃はおそらく七十代、若くて六十代後半だろう。胡  
麻塩頭に褪せた紺色のキャップを被り、白いものまじつ  
た顎髯を生やしている。小柄だが精悍な印象があり、全身  
から何か闘志のような、ただならぬものを放っている。両  
足を踏ん張るようにして、仁王のように立ち尽くしている  
のだ。

彼はそれとなく自販機にコインを入れて、冷たいコーヒ  
ーを飲んだ。

「あなた、メールくれた方？」

いきなり老人の顔が、隣にあった。

「ええ。すいません」

「謝ることないよ。それにしても今日は、集まりが悪いな  
あ。もう、予定時間なんだが」

彼は、時計を見た。二時三分。無骨なダイバーズ・ウォ  
ッチだ。

やっぱりやめとけばよかった。ほんの思い付きで参加し  
た市民団体のイベントではあった。しかし、このいかにも

頑固そうな、煮ても焼いても食えないような老人と二人だ  
けで、二、三時間歩くことになるのだろうか。気の弱い彼  
は憂鬱になった。せつかくの天気なのだから、家の近くの  
野川沿いの遊歩道でもゆっくり散歩していればよかった、  
と彼は思う。

「私、こういう者です」

白髪まじりの男は、にこりともせず、名刺を手渡した。

—画家 アトリエ牧田主宰 彩明会会員 牧田徹吾—

洋画家というよりは、作務衣が似合いそうな、頑固な職  
人といった感じの人物だ。人生についていらぬ説教でもさ  
れてしまいそうだ。羽木務は、名刺を持ってきていないこ  
とを謝り、喜多見に住むフリーのライターですといった。

羽木は、知人の編集プロダクションから急ぎの仕事が入  
っていたのに、なかなか集中できず、ネットで調べ物をし  
ていると、たまたまこの『路地裏ツアー』の広報が目につ  
れた。いっそ気分転換にと思って、足を向けたのである。  
ごく軽い気持ちでの参加であった。

しばらくしてもう一人、灰色のハンチングを被り、ステ  
ッキを持った背の低い小太りの老人が、にこやかに挨拶し  
た。

「お世話になりますよ」この人物も参加するらしい。甲高  
い嗶れ声で、昔の江戸っ子ふうの雰囲気の人だ。祭りの  
日など、半被はなびを着て世話役などやったら似合いそうであ

る。

突然、エントランスの回転扉が回って、いきなり華やかな空気が散き散らされた。

「ごめんさい、牧田先生。ちょっと秘書との打ち合わせが長引いちゃって」

「五分遅刻」ほそりと画家はいった。人が集まり始めた。

「もう、いじめないでよ、そうやって」

すねたように、笑った。

「こちらが有名な美人区議の御厨景子さん。こちら、今回初参加の、ええと、羽木さんでしたっけ」

画家はそれぞれを紹介した。

「あたし、話には聞いてたものの、今回参加は初めてなのよ。ちゃんと再開発計画の具体的な範囲を、自分の目で確認しておかないとね」

「ええ。僕もこの道路計画は、ネットや広報で知っていただけで」

羽木務は目をぱちくりさせた。

ひょっとして、区の広報誌などに顔写真入りで出てくるあの女性区議会議員だろうか。目を惹く派手な顔立ちのためか、最近は一、般の雑誌などでも取材されているし、ネットでも話題を呼んでいる。憂鬱が少し吹き飛んだ。

「何でこのツアーを、お知りになったのですか。あのホームページで、よくわかりましたね」

「いえ、この間、テレビでもシモキタ再開発問題を取り上げていたので、このところ、注意して検索したのです。

それであのサイトに引つかかって」

「そうか。テレビの影響か。ふむふむ」

グラマラスな美人区議は、ボールペンを取り出し、手帖に何かを書き付けた。

「やっぱり強いわねえ、一般大衆には、テレビの影響」

（ちえっ、一般大衆かよ）と思いながらも、羽木は見とれていた。白いブラウスに黒いパンツといったシンプルな格好だが、彼の知らない外国ブランドらしく、全体のラインが、どこことなくスタイリッシュだ。胡麻塩頭の画伯と並んでいると、奇妙な組合わせである。

こんなことなら、Tシャツにジーンズなどという貧相ないでたちではなくて、もう少しましな服装をしてくればよかったですと後悔した。

「あ、来た来た」と美人区議が小さく手を振った。

エントランスに、痩せた細縁メガネの男の影が現れた。

シヨルターバッグの中身を気にしながら、ひよいひよいと、軽い足取りでやってくる。

「そのサイトを作った澤田さんです。塾の先生」

「まあ、あの、塾教師、っていうか……」とメガネの男は顎に人差し指をあてた。「いや、実は私、某国立大学の院生くずれでして。学問で飯を食おうと目論んでいたら、

教授と合わなくて、人生曲がってしまったという、よくあるパターンなの、なんとも情けない。特に某大学の体質は……」

「その某大学って、どちらなんですか」羽木務は、何の気なしに聞いた。

「まあ、いちおう」と澤田はいった。「いちおう、東京とか、ついでるような、しょうもない、いわゆる、日本の代表的な、税金の、無駄使い大学で、ありまして」

すると美人区議が、突き放したような口調で、

「ちゃんと、東京大学っていいなさいよ、トードイって。自慢なくせに」

「あ、またまたまたア、御厨女史は、そういうふうには、個人情報、勝手に、横流しするんだから」

痩せた塾教師は、片手を口元に当てて、細身の体をひねり、照れ隠しのような笑い声を上げた。

もう時刻を過ぎてているが、何人ぐらい集まるのだろうか、と、羽木は訝った。集団は苦手なので、これ以上増えない方がいいとも思う。

「お、マスター、登場だな」顔をしかめて、画家がいった。色浅黒い、体格のいい中年男が「失敬」とでもいうように、額に手をかざしてやってきた。

「昨日、友達が店に来て、四時過ぎまでどんちゃん騒ぎやっつて、片付けに手間がかかって」エキゾチックな顔立ち

で、髭が似合う。太い首には銀のペンダント、腕にはブレスレットが光っていた。

「言い訳、無用」

にやりと洪く笑いながら、画家はいった。

「彼はバー『ロシナンテ』のオーナーよ。これでとりあえずメンバー揃ったのかしら。それにしても、暑いわね」

美人区議は、生白い首をあげ、片手に摘んだハンケチで、無防備に胸元に風を入れた。羽木務は、豊かなバストにどきんとした。選挙の票の三分の一は、この色気で吸い寄せたに違いない。

そうこうするうち、さつきから奥でもじもじしていた二十代のカップルが、こちらに近づいてきた。

「路地裏ツアーの方、ですか」と女がいった。

「ええ」と御厨区議。

「参加しても、いいですか」男は、気弱そうな笑いを浮かべた。

「もちろんよ」

お互いに挨拶を交わしたり、耳打ちをしたり、市民ホルの一面が少し騒がしくなった。

ふと、空気が、変わった。

牧田画伯が話を始めるらしく、持っていた旗を瘦せた塾教師に渡して、後ろ手を組みながら、真ん中に一歩進み出した。



「ええ、牧田と申します。絵描きをやっております」

老画家は、メンバーの前に、あらためて話を始めた。

「ご存知の通り、小田急線下北沢駅前を、現在、何とも無骨な、高さ二、三メートルの白い壁が囲んでおります。ちょうど、パレスチナのガザ地区を囲んでいるような、趣のない鉄のフェンスですな。線路脇にも、中から太い黒蛇のようなパイプがはみ出したり、泥まみれの瓦礫のような資材が積み上げられていたり、この町に似つかわしくもない、何とも荒涼とした、戦場のような工事風景が展開しております」

羽木務は、少し離れたところで、二人のタウンホールの職員が、こちらを見ながら、ひそひそ話をしているのに気がついた。すでにロビーで缶コーヒーなどを飲んでいた一般市民が、面白がってこちらの方に耳を傾けている。

「ついこのあいだまでは、あそこでギターを弾いたり、大道芸をしていた若者たちも、すっかり、いなくなってしまう。そして、ラブソングやギターの調べのかわりに、鋼鉄の重機が、日々、物凄い音を立てている。これは、駅前再開発計画ということで、小田急線を、地下にする工事があります。ところが我々の調べによりますと……」

羽木務も、ネットや雑誌を通じて、ある程度の知識は入っていた。

幅二十六メートルというのは、環状七号線並の幹線道路

低く官能的な美声で『ロシナンテ』のマスターはいった。

「そう」と老人は、力を込めた。  
「文字通り、文化破壊道路、神をも恐れぬ悪魔の道路であります。第一に、はたしてこの巨大道路が、すでに拡張工事を経ている井の頭通りの完成後に、本当に必要かどうかということ。第二に、この区のプロジエクトが区民に、つまりわれわれ納税者に、適切に情報開示されてきたかどうか、ということであります」

「いいぞ、巨匠。その通り！」  
マスターは、自分のテノールの魅力を、十分に意識していた。

ハンチング帽の江戸っ子風の老人は、マスターの顔を不快そうに眺めている。

「あの、すいませんが、政治的演説はタウンホールでは、遠慮していただきたいのですが」

いつのまにか中年の職員が、彼らの背後に立っていた。

「はて、なにか。私は仲間と、立ち話してただけですよ」  
牧田老人は、職員を睨み据えた。熟練の寿司職人や、蕎麦屋の店主のような、気迫ある面構えだ。

相手は愛想笑いをしながら、「ここはどうか、ホール内からお引き取りいただきまして」と画家をエントランスの方へ促すような仕草をした。

だ。この道は、山手通りと環七とを結びつけ、交通量を緩和させるのだそうである。牧田画伯の言うところによると、世田谷区は、小田急線の駅前再開発計画に強引に連動させて、六十年間も眠っていた計画を、いきなり復活させ、補助五十四号線という堂々たる幹線道路まで、作ることになったという。私企業と区の行政が手を結び、あえて

何の工事が分り難くしているようにも見える。  
「しかも、その巨大道路、これは、米軍占領下の時代、昭和二十一年に計画された過去の亡霊みたいな道路計画で、かつてマッカーサー道路といわれていたもので、あります。

この道路が、駅のすぐ東側、なんと、演劇の町、下北沢の文化的シンボルともいわれるスズナリ劇場や、その背後の斜面にあるカトリック世田谷教会を、完璧にぶつぶします。さらに、線路を斜めに横切りまして、北口のいちばんシモキタらしい町並み、すなわち、ブティックや、アンティークショップ、古着屋や、エスニックレストランの並ぶ個性的な区域を、無味乾燥でただっ広いだけの、アスファルトのロータリーに、変えてしまいます」

「まあ、京都でいうならば」美人区議は、突き放した口調でいった。「町家の家並みや、祇園みたいな魅力的な小路を、いきなり壊しちゃうわけよね」

「そんな殺風景な白茶けた風景は、千葉や埼玉に行けば、幾らでもあるだろ」

彼は、しばらく沈黙したあと、ごほんとか咳払いをして、「まあ、おいおい歩きながら、解説いたしましょう」

職員は安堵の表情をした。ロビーにたむろしていた市民たちは不審そうに目配せした。

最初、何となく苦手に感じていた羽木務は、この老人画家を、少し好きになっていった。

最後に遅れてきた男性が一人、慌てて駆け込んできた。痩せた背の高い人物で、のっぺりとした、眉の薄い、とりとめのない顔をしていた。

髪が短いので、坊さんのようにも見えるし、白いナマズのようにも見える。目だけが異様に鋭い。

「ええと、これが今回の地図です。ちょっと文字が小さくて見えないかな」

画家に促されて、塾教師の澤田が、バッグの中の資料を取り出し、参加者に手渡した。白ナマズは、資料を渡されると、畏まってお礼をいった。

「それでは、みなさん、出発します」

牧田画伯は再び旗を受け取って、野武士のように厳かに歩き始めた。一行は、その後についてゆく。

通りの向こうの高台の緑がまぶしい。

羽本務は、地図の上の道路計画を、目で追った。新しく予定されている五十四号線は、駅の東側に斜めに走り、茶沢通りを突き抜け、町で最も古い劇場を潰してしまう。

「あの職員、私のこと知らないみたいね」  
美人区議の御厨女史は、貰った地図を広げながら、不満そうにいった。

「いや、意識してるよ。さっきから奥で耳打ちしてたから」と、筋肉質のマスターが、片目を細くして笑った。太い首に下げたチャラチャラした光りものが気になる。

「こんな有名人、知らないわけ、ないでしょう」にやにやしながら、塾教師も、薄ら笑いを浮かべた。

茶沢通りのデイスクユニオンというレコード屋の前で、一行は止まった。入口手前に、白い自動販売機がある。

「やはり再開発反対のグループ、セイブ・ザ・下北沢という市民グループのやっているTシャツ自販機です。まあ、これを着て運動を広げよう、闘おうということですよ」

自販機には、Tシャツのイラストレーターとして、黒田征太郎、リリー・フランキーなどの名前があり、彼らのデザインによるシャツが、缶コーヒーのように選べる形になっていた。これはかなり予算がかかる仕掛けだ。

渡された資料を読むと、反対運動の賛同者には、町内の居酒屋やブティックなどの老舗はむろんのこと、坂本龍一や、フジ子・ヘミング、よしもとばなな、本多劇場代表の

本多一夫、生前の松田優作も通ったジャズバー、レディジョンのオーナー大木雄高。他にも建築家や社会学者、都市プランナーなどの名前が並んでいる。驚いたことに、著名なドイツの映画監督ヴィム・ベンダースの名前まである。これらの文化人や識者、アーティストは、すべて駅前再開発と、五十四号線の工事着工に反対しているのである。

「世田谷区も、大変な計画に手を染めたことになりませぬ」

羽本は、思わず呟いた。

「そうだな。これをあえて決行すれば、文化に無理解な行政という烙印を捺されかねないだろう」と、マスター。

「こんなことやったら、幾ら過去に立派な美術館や文学館を作ったとしても、すべて台無しということにもなりかねないって、区議会でもいってやったのよ、あたし」

御厨女史は、猛然と髪を掻き上げた。「どうも猪熊区長になってから、風通しが悪いわ」

「ヴィム・ベンダースには、誰かがこの運動への参加を、依頼したのですか」と羽本。

「いや、向こうから、自分で来たみたいですよ」と澤田。「彼は、もともと日本好きだから。何かで下北沢の風景が変えられてしまうというのを、聞きかじったらしいのです。日本の友人も多いでしょうからね。『東京画』見ました？」

「ああ、残念ながら。『ベルリン天使の詩』は見ました。『東京画』には、下北沢、出ましたっけ」  
「いや。でも、プライベートでは、よく来ているという噂ですよ」

陽がまた照りつけてきた。羽本は汗を拭った。まだ日本列島の北の方では桜が咲いているというのに、もうすでに初夏の雰囲気だ。最近、気候がおかしい。

厳めしい顔をした銀髪の画家を先頭に、旗を掲げた奇妙な一行が、茶沢通りのカーブを小田急線の駅方面に進んでゆく。しばらく行くと、目の前に、老舗劇場のザ・スズナリが見えてきた。

「演劇の町シモキタザワ」を作り上げたといわれる本多劇場グループの最初の芝居小屋だ。

決して立派なビルではなく、小さなスナックの集合した飲屋街を抱えたひとつのコロニーのような建物である。地方の温泉町に残っている映画館やストリップ劇場のようだ。向かって右側に、細い鉄階段が突き出しており、そこを昇っていくと、二階の劇場に入ることができる。人気の劇団が芝居を打つときは、ここに列ができる。羽本務は、大学時代にこの狭い芝居小屋でアングラ系の流れを汲む小劇団の演劇を見たことがある。何人かの女優や役者が、その後、テレビや映画で活躍している。

今回の「ツアー」は、たまたま偶然のきっかけで覗いて

みたのだが、この下北沢は、彼にとっても特別な街だった。

学生時代、友達に連れられて初めて来たとき、ここは新宿や渋谷とも違う、何か小さな自治都市、手作りの解放区といった印象を受けたものだ。世の中には、まだ、バブル経済の名残りがあった。その印象とは、ジャズ喫茶やライブハウス、ブティックが街の基調となっている妖しい多面体の宝石であった。日常生活から浮遊した密度高い小宇宙のような街。この街を訪れた者の想像力を刺激するイメージの庭園であり、東京というコンクリートの瓦礫の中の文字通りオアシスであった。静岡県という穏和で保守的な地方出身の彼にとっては、これはほとんどカルチャーショックといってもよかった。

「ええ……。この有名なスズナリ劇場も、マッカーサー道路によって、潰されます」

旗を片手でなぞりながら、牧田画伯はいった。五十四号線を、あえてマッカーサー道路と叫んでいる。「第二期工事において、ものみごとに、潰されます」

天を仰ぐようにして目を閉じる。

「入ったことないのよ、私ここ」

ブラウスの胸元をルーズにあけたまま、ハンケチで風を入れ、御厨区議が目を丸くしていった。

「そりゃ駄目だ。この町を語る資格、なしだ」

浅黒い顔をしかめ、ブレスレットをつけた太い腕を組み、

髭のマスターが、おもむろにいった。どこで灼いているのか、全身がすでに褐色である。

「そうなのよオ。今度、何か見ておこうかしらね。文化行政のリサーチとして。何がいい。いま何がワカモノに、受けてんの？」

そんな会話をしている二人は、何だか、個性派の女優と男優のようにも見えてくる。髭のマスターには、イタリアンマフィアの伊達男の格好をさせ、御厨女史にはベリリダンスの踊り子の格好をさせ、仮装パーティーでもさせたら、この派手な二人にはさぞかし似合うことだろう。すると、胡麻塩頭の牧田画伯は、ベテランの映画監督か演出家といった雰囲気だろうか。

羽木がその思いつきを楽しんでいると、先程から黙って付いてきていたカップルが、デジカメで熱心に写真を撮っていた。

ふと、羽木は気を利かせたつもりになり、「撮りましようか」といった。「じゃあ、そこで並んで」

スズナリ劇場の前に立って、ぎこちなく二人は笑った。撮る瞬間、女性の方が顔を傾げて、唐突にVサインをして見せた。

「あるがと、ごさいマス」二人は笑って頷いた。このアークセントは、中国人の日本語ではない。

「あ、ひよつとして、韓国の人？」

「そです。でもいま、日本に住んでますヨ。ソシガヤ・オオクラ」

「そうなんだ」美人区議も口を挟んできた。「出身は、ソウルかしら？」

「ソウル。二人とも、ソウルですヨ」

「そうよねえ。何となく、雰囲気でわかる」したりげに、御厨女史。

「アンニョン、ハセヨ」とつぜん区議がおどけていうと、「アニヨハセヨ」と相手も素早く応え、日韓の女同士で、笑いあった。

「観光に、なるど、思っで」若い男は、人なつっこい目をして、穏やかに頷く。

「ええっ、これが——。市民運動のツアーが？」

羽木は、そういいながら、デジカメを戻した。

「シモキタザワ観光ですヨ。町の詳しい説明が、つくですよ。彼女、頭いいね」

男は、体を反らし、感心したように女を眺めるポーズをして、褒めてみせた。

女は、恥ずかしそうに両手で顔を覆って、いきなり男を横から突き飛ばし、韓国語で何か鋭く抗議しながら、恋人を睨みつけた。

男は鷹揚に笑って「もう、これですから」というような顔で、情けなさそうに頭を振ってみせた。なかなかいいカ

ップルだ。

「朴といいます。ヨロシク」

「金と、いいます」

二人はあらためて自己紹介をした。

スズナリ劇場脇の小路を曲がり、教軒の鄙びたスナックを横目に進むと、フェンスで仕切られた緑の敷地があった。まぶしいほどの若葉が、いきなり目に飛び込んでくる。小径は緩やかな斜面になっており、奇妙なカマボコ形の建物と、住居らしいアパートがあった。

建物の入口には薔薇のアーチがある。季節には、イングリッシュ・ガーデンのような風情となり、さぞ美しいことだろう。小高い斜面の上に、陽を受けた教会の白壁が見えた。幾つか並ぶ縦長の窓に、彩色されたステンドグラスが嵌められている。

古風な白壁と、新緑との対照が、息を飲むほどだった。すでにこの二三週間で、樹木は夥しい葉を繁らせ、空を覆う新緑の密度が、いっそう濃さを増していた。

柔らかな色の草が繁る道を、一行はゆっくりと上がって行く。

彼らはすでにカトリック世田谷教会の敷地内に入っていた。

奥には、不思議な空間が広がっていた。右手には、聖ヨ

ハネ礼拝堂と称するロマネスクふうの聖堂があり、多角形の屋根には、小さな十字架が立っていた。

高台になった中庭の左手は、広々とした草地になっており、幅十メートル以上の蒼灰色の岩崖が迫っていた。その芝草の広がり半分を、大きな樹木の影が覆っており、陽が直接当たる明るい草地が、金緑色に輝いている。

小田急線の線路からさほど離れていないのに、空気の質がまるで違う別世界だった。

とりわけ目を惹くのは、その崖のものものしさだった。真ん中に大きな半円形の洞窟があり、四角い祭壇のような石の台が設えてある。その右上方の小さな洞に、青い衣をまとった聖母マリアの像が、天を仰ぎ祈っている。異国的な聖なる静謐さに満ちた一画。茶沢通り沿いのスナックや、飲食店、レコード店、古本屋などの雑然とした風景を見慣れていた一同は、茫然としていた。

「こんな場所が、あったの。知らなかったわ。木蔭の向こうの坂道は、何度も通ってきたのに」

御厨区議は、かすれたような声を出した。

彼女の手前では黄色い蝶が二羽、戯れるように飛んでいる。

「俺も、下のスナック街までは、よく来るんだが」

髭のマスターも呟いた。

「ええ」と、老画伯は咳払いをして、芝生に旗を突き立て



た。「ここは、世田谷では戦後建てられた、最も古いカトリック教会です。こちらの十字架のある建物が聖堂です。もともとは、府中の墓地に建てられる予定で、はるばるフランスから運び込まれた建材が、戦争で一時中断になり、ここに移ってきたそうです。クリスチャンではないのですが、私もこの聖堂は好きで、何回か油絵に描いておられます。向こうの坂道から見ると、この庭からの眺めが美しい」

画伯は旗を斜めに握りしめ、奥へと歩いていった。

「さて、この洞窟を見てください。これ、どこかで見たことがありませんか」

「ルルド、じゃないかしら」区議はいった。

「そう。フランスとスペインの国境近くの巡礼地、ルルドの泉で有名な町ですね。十九世紀の半ば、村の幼い牧童たちが、聖母マリアの顕現を見たと言われるルルドの洞窟を、模しているわけです。難病が治るといって、バチカン公認の奇蹟ですね。この洞窟祭壇の様式を、通称ルルドといいますが。カトリック教会の庭にはときどき見かけられますが、ここはかなり大きい」

「まあ、カトリックは、どこか日本の神道や仏教と近い土俗的なものがありますからね」

澤田は顎に人差し指をあて、したりげに一人で頷いている。羽木務は真下まで行って、聖母の像を見上げた。岩の上

には低木や蔦が生い繁っている。

「しかも、これらはすべて、信者さんが協力して手作りで作ったそうです」

韓国人カップルは、男の方が日本語に習熟しているらしく、彼が解説する度に、彼女が神妙な顔で頷いている。男は、光の角度を確かめながら、何枚か恋人の写真を撮った。

「戦後すぐ、この近くにあったプールが壊されたままになっていて、その残骸が、積み上げられていた。そのコンクリートの廃材を積み上げて、ここまで立派なルルドを作ったそうです。結婚式や、いろいろな教会のセレモニー、フリーマーケット、パーティーなどでも使われている美しい庭です」

牧田画伯は、そこで少し疲れたように目を細め、キャップを取って、頭を扇いだ。

髭のマスターはもともともしげに首を振り、美人区議は感銘を受けたのか、ハンケチで口を押さえていた。

「——例の幹線道路は、この教会の敷地を通るのです」

塾教師の澤田が、不意にそう断言した。

眉をぴんと釣り上げ、細縁メガネの奥で鋭く目を光らせる。

「スズナリ劇場を潰してからこちらに伸びて、いまわれわれがいる場所を、見事に突っ切るはずですよ。幅二十六メートル、環七並みのでかい車道がね」

「そう。ピアニストの家の前を、交通量の激しい道路が通ることになる。ときどき綺麗な音が聴こえてきましたが、

やがてそんなことも、なくなるでしょう」

淡い春の雲が、枝々の間を流れていく。

岩陰の聖母マリア像にも、陽が射していた。

「ハギサン。スママセン。また、お願いシマス」

いきなり、韓国人カップルにデジカメを手渡され、羽木務はびっくりした。

穏やかな微風が中庭を渡っていった。

二人はすでに、聖母マリアの洞窟の前に並んで、顔をびつたりと寄せ合っている。共に指でVサインを示し、白い歯を見せ、大袈裟な笑顔を作っていた。

## 3

霞むような晴天の中、鉄が匂っていた。遮断機が、ゆっくりと立ち上がった。

「下北沢路地裏ツアー」の一行は、交番前の踏切にさしかかった。

新宿駅方向には、代々木上原の住宅街を超えて、遠く青紫色の高層ビル群が霞む。赤錆に縁取られた白銀色のレールが、幾条も春の陽を浴びながら伸びている。

くたびれたような午後の日射しが、白っぽい土埃に汚れ

一同から、たちまち小さな悲鳴が上がった。  
ふと、羽木が気づくと、最後に遅れて参加してきたのっぺりとした白ナマズのような男が、携帯をこちらに向けて撮っている。何かの記念だろうか。撮り終わると澄ました表情で、後ろ手を組んで佇んでいる。  
「ひどいわ。マリア様の庭に。何とも罰当たりな計画ねえ」と御厨女史。  
「これはねえ、クリスチャンだけの問題ではない。世田谷区の行政が、精神的遺産というものを、どう考えるかということですよ。いわば文化財でしょう、この風景は」  
老画家は腰を庇いながら、険しい目で一行を睨みつけた。  
「文化財ねえ。ウチは浄土真宗なんぞね。ま、どうでもいいことだが。日本人は、仏教だろッ」  
例の江戸っ子口調の小太りの老人が、ステッキで芝草を突きながら、わざと聞こえるような大声でいった。  
さっきの黄色い蝶々が、追いかけてっこをしながら、木の枝を透かして青空へと舞っていった。日光の中で、きらきらと輝く小さな金の環に見えた。

木洩れ日が芝草の上に淡い紫の模様を投影している。

「さっき通ってきた道で、アパートが見えたのですが、それがフジ子ヘミングさんの家です」

澤田がすぐ隣にいた羽木にいった。

「ああ、ピアニストの」

た砂利に照りつけていた。

踏切の西に下北沢の駅構内が見える。仄暗いプラットホームに、電車を待っている人々。構内を通した遠景は、トネルの向こう側のように、白く明るい。駅側面の風景は、殺風景な白いフェンスで囲まれていた。

半年前は確固として存在していた建物が、いまではすっかり取り壊され、そこだけぽっかりと空虚な青空が見えている。この再開発計画では、駅全体を地下にするという。

しかし、いまだに駅ビルにするのか、駅舎だけにするのか、具体的なイメージも発表されていない。行政側にも影響力を持つ私鉄企業の駅前開発では、毎度ながら地域住民には何も告げられず、どこかの会議室で一つの計画が決定され、それは絶対的な効力を持つ。しばらくすると、白っぽい大型の建造物が、次々と建てられてゆく。その一方で、懐かしい古風な町並みが、櫛の歯が抜けるように、人知れず壊されていくのだった。沿線住民は、都政に食い込んだ大企業の前に、常に無力だった。

間もなく赤いシグナルが点滅し、甲高い警報が鳴り始めた。

「駅前のロータリーができるよ、おそらくは、いまの町田みたいな風景になるでしょう」

踏切を渡り終えた一行に向かって、老画家は溜息をつくように、いった。

所ですね。成城学園の隣だしね。大学時代、シモキタに住んでいたのですよ。一番街のちよつと北に入ったポロアパート」

「僕もこの街に住みたいとは思ったのですが、何だか飲み込まれそうでね」と羽木は応えた。

「飲み込まれる？」

「生活が。つまり、毎日この街で飲み歩いたり、女に惚れたり、友達と会ったりで、たちまち時間が過ぎてしまう。いわばここは、小さな御伽の国です。じっさい、僕らの先輩にも、この街に住み着いて、いつのまにか、四十になり、五十になり、それでもまだ青春が続いていると錯覚している夢見る中高年、という人がいっぱいいます。皆、サラリーマンや役人ではなく、編プロをやったり、イベント企画の会社をやったり、ヤクザな商売で食いつないでますが。なにしろ、この不景気だしね」

「わかる、わかる。一度この御伽の国に住むと、他の街には住めなくなってしまうんだ。かつての神童、今ではしがない塾教師のオイラも、まあ、似たようなもんだし……」

駅の脇の左手に入ると、そこは不思議な気配を漂わせている下北沢北口食品市場、通称、駅前マーケットの空間が始まっていた。

屋根は低く、通路は狭く、戦後すぐに発生した焼跡鬧市

「この辺を、でかいビルが囲むわけだ……」と羽木。

「そう。渋谷や新宿辺りから、大手資本が進出し、高さ七〇メートル、地上一七階ものビルが林立する。巨大な駅ビルを中心としてね。ロータリーでは、タクシーやバスが回り込み、効率よく人間どもが運ばれる」

画伯はおもむろに、顎髭を撫でた。

「シャネルや、ヴィトンのお店が入るかも」と御厨女史がいった。

「何だよ、まんざらでもなさそうに」と髭のマスター。

「しかし、味もそっけない町になるな。もちろん、その晩には、ウチのバーも出て行くことになるがね。常連どもども」

「あら、民族移動みたい」

「そうさ。まさにエクソダスだ」

「さあ、そろそろ駅前市場に入りましょうか」

世話人役の澤田が、片手を上げて一行を手招きするような格好をして見せた。

「どこ、お住まいですか」澤田が、歩きながら話しかけた。

「近い世代でしょ、ウチら」

「喜多見です」と羽木は答える。「世代ねえ。世間でいうところの、オタクってやつ？」

「フッフ。そうね。喜多見は野川もあるし、緑の多い良い

の雰囲気はまだに残している、いまや東京でも数少ない場所だった。天井は、トタン板やベニアがひしめき合うように組み合わされ、さながらドイツ表現主義映画のような、舞台裏の天井のような、雑多で不規則な構造を顕わにしている。

意外にも、二階の窓辺などにはモダンな装飾が施され、随所に昭和の残り香を感じさせる。路地は半世紀もの間、夥しい人間たちに踏みしめられ、奇妙な光沢を放ち、陶器のような緑がかった鼠色を帯びている。小さなカスバ、香港九龍城のようなその内部には、ついこの間までは、干物乾物、野菜果物、食器陶器や手袋や足袋やバッグ、袋物の類、駄菓子や日用雑貨を小売りする露店のような小店舗が並んでいた。

しかし、駅前再開発計画によって、大方の店は、多少の金を握らされて追い出され、いまは期限付きで内部を改造した飲み屋などに活用されている。

「しかし皮肉なことに、あと半年しかやらない、一年しか営業しないというところに付加価値が生じて、小さな焼鳥屋や居酒屋が、いま雑誌に取り上げられて大流行なのです」

牧田画伯は、旗の端を撫でながらいった。

「この市場の中は、私も昔から馴染みで、知り合いの店もいくつかあります。最近の若者の発想は大したもので、廃屋同然の店を、お洒落なワインバーに作りかえたり、ユニ

「クナ和食レストランが出現したりと、なかなか連中、クリエティブですな」

「この店なんて、懐かしい作りね。大正十三年からあるお団子屋なのね」

御厨区議は、腕組みをしながら看板を見上げた。その店は、ガラス戸で開かれた間口の狭い店で、カウンターやテーブルが覗いていた。

「じつはここ、『うさや』といって、竹中直人主演の映画セットを、そのまま飲屋にしてるんです。二階もどこかの民家みたいで、いい感じですよ。看板にある団子とかまんじゅうとかは、実際には関係ありません」澤田が流暢に解説した。

韓国人カップルが、格子状になったガラス戸を覗いている。

少し離れた所で、例の白ナマスが、携帯のカメラで撮影していた。ことによると、風景ではなく人間を、撮影しているのだろうか。羽木は訝しげに彼を見た。長身だが、どことなく冷酷な尼僧のような顔立ちだ。

前方の楕円形の小窓から、今夜のための支度をしている二十歳ぐらいの女が見える。壁には横文字のメニューが手書きされている。

「もつと奥へ、参りましょう」

牧田画伯は、髭に覆われた厳めしい顔を反らして、悠然

と進んでいった。

仄暗い路地の壁にはバグが吊され、木箱の上には足袋や、靴下、雪駄等が並んでいる。薄暗い店の奥で、老婆がひっそりと座っていた。狭い壁の隙間に、洗濯物が干されている。まるで東南アジアのバザールだ。ここに住んでいる人間もいるのだろうか。かすかに微臭い。平成の日本ではないような褐色に沈んだ一画は、空気の質まで違っていた。

「汚いねえ、きたない、きたない」ステッキの老人が、いきなり語気を強めて、吐き捨てるように、いった。「ボヤでもあったら、どうすんだろねえ」

「あの角に、以前『せつちゃん』というおでん屋があつたね」

髭のマスターは、老人には全くとりあわず、懐かしそうにいった。「せいぜい数人が入れるような狭い屋台。劇団関係者には有名な店だよ。ワラジという、どでかい厚揚げがうまかった。明け方まで、よくその角に椅子を並べて、肩をくつつけ合って、若い連中が騒いでいたっけ」

「ロシナンテから流れていくパターンとかね」と、区議。「あつた、あつた、そういうこと。夜の二時頃に店を閉めて、俺も一緒にいっていった」とマスター。

このマーケットを囲む薄い壁をひとつ隔てて、駅がある。おでんやの屋台のあつた角を廻ると、アンテナが斜めに突

「あの、僕は、防災上の問題だって、聞いてたけど」

羽木は口を尖らせた。

「こんにちは。素朴な、世田谷区民の皆様！」澤田が、皮肉っぽく冷笑した。「そんなわけ、ないでしょ。一体、いつ、どんな火災があつたんですか、この駅前市場付近で。」

下北沢で、大火事があつたことが、ありますか」

「たしかに」羽木はあっさりと、納得した。

「あんたらサ、そういうけどね」不意にステッキの老人が、我慢しきれずに甲高い声で口を挟んだ。「これからもないとは、断言できないだろ。安全なことに、越したことはねえんだ。それに、住民の意志だって、再開発を望んでいるじゃネエか」

「貴方がいう住民とは、地権者のことですかな」

牧田画伯が、穏やかにいった。

「住民と言ったら、住民なんだよ。なあに。地権者だろうと地主だろうと、立派な区民ですよ。この辺でロクに働きもせず、ふらついている若者と違ってサ、税金をたんまり払ってるんだ」老人は、厚い下唇を突き出し、画家を睨んだ。

「爺さん。ロータリー予定地の地主ではない地域住民は、どうなんですか。つまり、再開発で、たんまり金の入ってこない人間は、全然、同意してないでしょう。というよりも、このままの雑多な街並みを愛しているわけだ。それとも、土地持ちでなければ、風景について物言う権利はない

赤錆びた壁面には、演劇やライブの広告が何度も貼られ、剥がされ、また重ね貼りされたぼろぼろの跡が残っていた。ほとんど半分以上の店が、すでに営業をやめていた。それでも路地裏からは、夕暮れに向けて準備を始めた焼き鳥屋の香ばしい匂いが漂っている。

「さて、この駅前マーケットも、再開発で、すつぽりとなるわけですが、行政側と小田急電鉄の狙いは、駅周辺の五千平米のスペースを、広大なロータリーにすることで、幅の広い道を造ることにより、法律上、周囲に高層ビルを建てられることになる。六、七〇メートルもの一七階のビルの群れです。実はここにこそ、彼らの本当の狙いがある」と老画伯。

「つまり、交通量緩和なんて、ただの建前。連中は駅前に、町田や渋谷みたいな大型ショッピングモールや、デパートの箱物を作って、収益性の高い土地利用がしたいわけよ。そのためにわざわざ血税を使って、いらぬ幹線道路まで造ろうとしてるわけ」

御厨女史が、豊かなバスの前で腕を組んだ。



とてもいいのかい。……あんたらは、土建屋行政から、美味しい餌で一本釣りされてるだけさ」

老人よりも頭ひとつぶん背の高い、イタリヤの伊達男のようなマスターが、濃厚なテノールの美声に、多少の凄みを利かせていった。

するとステッキの老人は、慌てて目を逸らした。

ロクに働きもせずふらついている若者という一言に、かちんときた羽木は、内心快哉を叫んだ。実際のところ、不景気で仕事の少なくなったフリーのライターなど、ほとんど引き籠もりのニートに等しいだろう。

でつぷりとした老人は、厚い下唇を突き出し、ハンチングを乱暴に被り直して、大袈裟な咳をひとつした。

「まあ、いいじゃないの。ここで議論することないわ。いろんな人がいるわよ、世の中」と女性区議。

「ほう、あんた、美人だねえ」老人は、急に目を細めて媚びるように、御厨女史の顔を覗き見た。

「まあ、ありがとうございます」

彼女は、丁寧に頭を下げてから、同志のマスターに向かって、意味ありげにウインクした。

「議員さんかね。大したもんだ。推進派を敵に回して、ジャンヌ・ダルクみたいだねえ」

話題が逸れて助かったという顔をしている老人を見て、羽木は、ぶつと吹き出した。

《下北沢路地裏ツアー》の一行は、駅前マーケットを過ぎて、やがて北口の雑多な一画に入り込んだ。花々の匂う天気の良い日だった。すでに住宅街の庭には、紫色のモクレンや、白いハナミズキなど季節の花が咲き誇り、華やかな色彩にあふれていた。水溜りには、写真のように雲の影が映っている。

この周辺は、もともとは住宅街だったけれども、現在ではブティックや古着屋、アンティークショップ、それにフレンチやイタリヤン、アジア系の小さなレストランなどが建て込んでいる。

いまから三十年以上も昔、アジア各地や、アメリカ西海岸、ヨーロッパを放浪していた若者たちが、帰国してから、比較的地価の安いこの辺りに、輸入雑貨店や古着屋や一風変わったバーを始めたという。

つまり店の初代オーナーたちは、かつてビートルズやローリング・ストーンズに入れあげていた、ヒッピーやフラワートルドルンの成れの果てなのだ。

彼らは中央線沿線では、雑多な雰囲気を保つ吉祥寺、阿佐ヶ谷、西荻、高円寺にたむろし、そして井の頭と小田急線の交差するこの下北沢といった町に、ごく自然に住み着

などと、うそぶくのである。

さらには、決して画一的な小市民生活に埋没したわけではないといわんばかりに、腕のワイシャツをまくり上げ、ネクタイを左肩にたくし、胸を傲然と反らしつつ、次の生ビールを注文する。「……あの頃の連中、いま頃、どこでどうしているもんかなア」などと、目を細め、感慨深げにつぶやきながら。

こうして、元ヒッピー達の経営する店を、自称元ロッカー、元シンガーソング・ライターのネクタイ族が、経済的に心情的に、脇から支える常連客となっていた。ここでは、長い髪を切らずにそのまま中年を迎えた人種と、きちんと髪を整髪料で撫で上げた企業の間管理職とが、仲良く共存している。

そんなわけで、商店街の価値観とも、市民のそれとも異なった独特の解放的な意識が、このカラフルな村落のような町では、裏道の石ころや苔にまで染みついていたのである。

日曜の午後なので、路地という路地を、若者たちが思い思いの格好で、そぞろ歩きをしている。路地裏から次の路地裏へ……。この町を訪れる若者たちは、まるで岩や藻の中を泳ぐ回遊魚のようだ。

日光と木蔭のだんだら模様。樹木も多いので、ツアー一

いた。色とりどりのインドのお香や、まがい物のエキゾチックな仏像を売っている店、ジーンズや革ジャンの古着店、香辛料の匂うタイ風レストラン、ユーモラスな凶々しさにあふれたパリの工芸品の店など、極彩色のアジア文化と、欧米のロック音楽とが、狭い路地のどん詰まりで、妖しい紫煙のように混じり合った。

そんな店では、本来は輸入雑貨の店のはずなのに、夕暮れともなると、仲間内では酒がふるまわれ、ときには酒以外のもものも回つて来た。

興が乗つてくるとともに、端つこの柱の陰あたりで、おもむろにギターが奏でられ、丸めた指の隙間から、鋭い汽笛のような口笛が吹かれ、手拍子、脚拍子が始まった。

ほんのりと頬を染めた艶っぽい歌姫が、いつともなくグラスを片手に、ゆらりゆらりと立ち上がり、長い髪をかきあげながら、甘くハスキーな美声を響かせて、やんややんやの喝采を受けた。

夜ごと繰り返されるゲリラ的な深夜の饗宴……。その音と光は、安っぽいガラス戸の隙間を通して、迷路めいた路地裏にも、星明かりのように洩れていった。

そして、とりあえずネクタイを締めて、社会に復帰したサラリーマン達が通い詰めるようになり、「今では毎朝、満員電車で揺られているこの俺だってさ、こう見えても、昔はその辺のライブハウスで、ちよいと鳴らしたもんヨ」

行の顔が、日向になったり、日陰になったりを繰り返した。牧田画伯はときおり、店の主人や店員たちに声をかけられる。老画家は、その度にかすかに微笑し、軽い挨拶を返していた。

大きく枝を張った楠のあるマンションのベランダでは、部屋の住人らしい若い外人男性が、ギターを弾いて得意げに歌を唱っていた。その下を若者たちが、紙袋を下げて、けだるそうに、ぞろぞろと歩いていく。彼らと目が合うと、金髪男性は、上機嫌で投げキッスを返して笑って見せた。いま住んでいる部屋が、気に入っているらしい。

この辺りでは、昭和三、四十年代に建てられた木造民家が、そのまま二階建ての和風フレンチの料理店に改造されたりしている。ブロック塀には、いつものメニューが記され、魔女の腕のような枝に吊るされた黒板には、本日のお薦めの三陸海岸の牡蠣が、白いチョークで手書きされていた。玄関脇の木箱には、数本の濃緑に輝くワインの瓶が並んでいる。

鉄の装飾のついた窓の中、ひっそりとした仄暗い室内に、アールヌーボーふうの緑やオレンジの花型ランプが見える。常連客たちはパンを指でちぎり、肉料理にナイフを入れながら、ひそひそ声で語らっている。

やや暗くなった奥には、網目のある旧式の蓄音機や、黒い扇風機が覗いていた。木陰のテラスに灰緑色のパラソル

を立てた外テーブルでは、三十代後半ぐらいの二人連れが、ちょうどワイングラスの縁を、カチンと接しているところだった。

「駅前ロータリーは」と牧田画伯は、窄めた旗で指し示した。「ちょうどこの辺りの幅まで、フラットなアスファルトにしてしまいます。六十年かけて、できた風景ですがね。車が入り込み、さっきの十字路の辺りで、いちばん太くなります。バスやタクシーが回り込むのでしょうか」

参加者たちは、重苦しいものを感じていた。「それって、自然破壊、環境破壊に近くない？」御厨女史は、訝しげにいった。

「ですよ。林道を一本通すと、周囲の動物や野鳥たちが、死滅するみたいな」と羽木。

「土建屋行政の最たるものだ」とマスター。「ダムや道路などいつもの公共事業の手口だけど、とりあえずどんどん工事を進めておいて、後戻りできない状態にするわけだ」

「猪熊区長と役人たちが、密室で都合良く人選した諮問委員会の見解を、一般区民の意見だということにしてね。つまり、大規模な再開発やむなし。いやそれこそが、住民の願いだ」と

舌打ちしながら澤田がいった。

「ちゃちなマインド・コントロールよね。世田谷区が、広く意見を聞くという建前でかき集めた学識経験者というの

「な、なんだよ。例えばの話さ。例えばの話だよ」

老人は、慌ててそっぽを向き、ハンチングを取って、膝の辺りをばさばさと叩いた。

棕櫚の樹や、ぎざぎざのヤツデの木に囲まれた洋館もどきの家。古い民家の裏手を通り抜け、軒先をくぐる。猫や犬や、世田谷一帯に棲み着いているというハクビシンや狸が夜中を通り抜けるような道に入る。うっすらと苔に被われた石畳に、古いブロック塀。そして、垣根から覗く物干し竿や赤い三輪車。

やがて彼らは、住宅と店が入り組んだ小路を過ぎて、再び、思い思いのファッションを着こなした若者たちの多い路上に戻った。

何十台もの車が入るような大型ガレージとして使われていた建物に入る。

いきなりラップ音楽が、大音響で飛び込んできた。そこには洞窟の中の迷路のように、雑貨屋やアクセサリー、ファッションの店舗が、所狭しと入り込んでいた。極彩色の古着が葡萄棚のように吊り下げられ、照明に照らされて立体的に浮かび上がる。太い鉄骨が剥きだしのままの天井や、落書きのある壁には、安物の首飾りや宝飾品が吊り下がり、鏡に映されて輝いていた。どこを見ても、光と闇とけばけばしい色彩が、万華鏡のように鏤められている。

が、なかなか楽しいメンバーなのよ。旧建設省の天下り官僚、財団理事の谷島孝。同じく旧建設省官僚から大学教授になった岸田幸隆という、元役人の二人。そして小田急電鉄系のシンクタンクに属していた大山次郎という人物で作られているの。ステキでしょ」区議が言った。

「それと宮地芳明は、二子玉川再開発を展開したデベロッパー出身」澤田はつけ加えた。

「つまりその委員会は、再開発の推進派そのもの、ということ？」と羽木。

「そう。やらせというか、最初からゴーサインありきの出来レースよ。ぬけぬけとまあ」

「しかし、なんだナ」むつつりと黙り込んでいたステッキの老人が、下唇を突き出した。「ああいう、民家を使った小料理屋なんざ、自分達は、気の利いたことやってるつもりなんだろうが、不衛生だわな。昔の家の黴臭い台所を、そのまま使ってるんだろ？ ネズミだって出るし、ゴキブリだって混じってる。ヤダネー。どうして、どうして。あんなもなア、食べられたもんじゃないヨ。あたしや、ちゃんとしたモダンなビルの店の方が、好きだね」

「爺さん、どこの店で、ゴキブリが入った料理を出したって」ロシナンテの店主が斜め上から睨みつけた。「こら、証拠出せよ。こっちも一応、食いの屋なんでね。いい加減なこといってると、許さないぜ」

赤や桃色、水色や黒、女性物の下着は、薔薇やボビーのように、花ざかりだった。

ラップの音が、天井にまで響く。

それぞれの店は、小動物たちがこしらえた地下の巣穴のようにも見えた。コンクリートの通路には、かつての車庫の表示らしき白線や矢印の跡が、色褪せたまま残されている。茶髪に染めた若い女たちが、澄まし顔のまま、軽くラップのリズムに身をゆだねるようにして、ネットレスを並べ変えている。彼女たちの細く尖った爪先には、小さな花や星が描かれていた。

隣の店では、フランケンシュタインやドラキュラなどのグロテスクな仮面や、ポップアートのようなオブジェ、怪物たちのぬいぐるみが並べられ、こちらを睨んでいた。

一行は、まるで初めて地下世界を捜査する探検隊のように、好奇心を剥きだしにして店を覗いていた。韓国人カップルは何か買うつもりなのか、店員と交渉を始めた。

「若い人の発想って、凄いわねえ。こういうアイデア、あたしの選挙に活用できないかしら」

区議会議員が、仮面の赤い鼻に触れながら、呟いた。

「そういう遊び心のない人間には、無理だね」と、バーの店主。

「では、こちらに向かいます。迷子は、いないよね」老画伯が、穏やかに笑う。

折れ曲がり、ドアを開け、トイレの横の角を過ぎると、どうやらスーパの一画に着いたらしい。

一つ向こうの明るいフロアでは、近所の住宅街に住んでいるような主婦やサラリーマンたちが、野菜やパンや麺類を入れた籠を下げて、レジで並んでいる。ここではすべて、白っぽい無機質の照明に照らされていた。

まるで地下の極彩色の異次元世界から、脱色された日常空間へと戻ってきたように思われた。二つの世界は、プレーリードッグの巣穴のように、立体通路で繋がっていたのだ。

一行は、白い廊下を出て外の景色の見える開放的なガラス窓の前に立った。

「ほらあそこ。下に見えるのが、駅前マーケットです」

澤田が、手をかざした。

大きく張り出したガラス窓から、さつき歩いた赤錆びた迷路、焼跡闇市時代から続く駅前マーケットが望める。とはいももの、ほぼ真上からの視界のため、茶色やブルーの板を、ピカソやブラックのカラージュのように貼り合わせた無惨なトタン屋根や、貧しいバラックの壁が、見えるだけであった。

——ある感慨が、一行を支配した。

確かに、汚いのである。みつともないのである。しかし、このトタン屋根の赤錆や、風雨による破れ目は、戦後日本

「あら、あの方、大丈夫かしら」

ふと見ると、例のハンチングの老人が、具合が悪くなったように、通路にしゃがみ込んでいた。羽木は少し心配になった。青紫色の髪の少女めいた女性店員は、店先に蹲った老人を、不快そうに眺めていたが、助けようもしない。「いや、ちよつとね」

額に汗をかいて、ふうふう荒い息を吐き、小太りの老人は、苦しそうにしていた。「よくあることなんで」

御厨女史が背中をさする。朴と金の韓国人カップルも、不安そうに覗き込む。

老人は、むりやり笑顔を作り、何とか持ち直して立ち上がった。「こういうところは、駄目だな、あたししゃ」

ハンチングの老人は、皆から途中で帰るように促されたものの、駄々っ子のように頑として聞かなかつた。意地になっているのか、心臓の持病から来るいつもの発作だという。

多少迷惑ではあったものの、参加続行ということになった。

《下北沢路地裏ツアー》の一行は、地下洞窟のような極彩色ガレージを抜け、エレベーターに乗った。

何階か上昇し、ドアが開く。すると、何の変哲もない単調なビル内の通路に出た。窓のない長い長い廊下を過ぎ、

の歴史であり、象徴そのものではないだろうか。

「行政と電鉄は、これを撤廃して、おそらく巨大な駅ビルを建てるでしょう。その中には、ショッピングモールあり、映画館やシアターあり、コンサートホールや美術ギャラリーまで、あるかも知れない。コラ、市民ども。お前ら、そんなに文化が欲しいなら、くれてやるってね」と画伯。

「ヴェイトン、ブルガリ、高級ブランドも入るかもね」皮肉つばく、御厨女史が加えた。

「アコムや武富士、ドコモやマクドナルド。その他、駅前定番ショッピングもな」とマスター。

牧田画伯は、緑色のツアーの旗を、カチンと突き立てるようにして、語気を強めた。

「つまり、本日、私たちが歩いてきた万華鏡のような風景は、あとかたもなく、煙のように、消える。そして大手資本は、文化の街、若者の街というブランドだけをまんまと頂戴して、温もりのある地域のコミュニティを分断させ、手作りの感触を抹殺するでしょう」

「そしてきっと、ショッピングモールの中に、昭和のレトロな街を、わざとらしく再現してみせるんだわよ」と御厨女史。

ツアー一行の目前には、ほんやりと霞んだ晩春の空が広がっている。

駅構内と古いマーケットを仕切る薄い塀を、緑に繁った



蕨が這い廻っている。強い陽射しを受け、濃緑の葉が照り輝く。駅北口の細い道は、人混みで混雑していた。

「まあね、ワタクシ、思いまするに」と澤田が口を開いた。「最小のスペースから、最大の利潤を吸い上げるといふ哲学だけが、都市や町を作っているわけじゃないと」

「いいこというね。インテリのわりには」マスターが突っ込む。

「いや、例えば銀座や六本木みたいに、客単価が何万円、何十万円のブランド店だけにする必要はないんですよ。不健全でしょ、そんなの。世の中のすべてが、投資対効果の考えだけで、いいのかってこと」

「だからさ、千円二千円の小銭商売をやる『ロシナンテ』みたいなしよほい店だつて、世間には必要なんだよ」

新宿方面から、電車がゆつくりと入ってきた。プラットホームの人影が移動してゆく。

「役人の頭の中の青写真、都心近くの利益率の悪い町を、根こそぎ平準化しようという魂胆なのよ。そういう頭の固い基準を、グローバル・スタンダードならぬ、トウキョウ・スタンダードにして、定規のように当てはめてるだけ。いまにそこらじゅうが均一に、ミニ町田、ミニ渋谷になつてしまふわ。人間を、消費者としてしか見てないのよ」

御厨女史は、人差し指で窓ガラスをなぞりながら、悲しそうにいった。

まらない呑屋のマスターは、浮かぬ顔だつた。「聞いたところによると、二子玉川、新築マンションに空きが目立ってるんだつてね」

「再開発と称して、厩大な金をつぎ込んでおきながら、空洞化している。生け簀の中を整理して巨大にすれば、魚が育つ、というもんじゃありませんよ」と澤田。「同じ失敗を、シモキタで繰り返すかよ」

「でもさーア一体どこが、投資対効果よねえ。ぜんぜん計算も狂ってるじゃないの。血税の大出血ね」御厨女史が、吐き捨てるようにいった。

「やつぱり町は、緑の藻があつて、岩陰があつて、魚が隠れ潜む穴があつてこそ、ですよ」

いつのまにか羽木はいっぱしの反対派になりおおせていた。我ながら恥ぢずかしい。

「そうそう。それでこそ、卵も孵化する。魚たちも回遊する」と澤田。

卵の孵化。藻のゆれる水槽――。

路地のあちこちに、陽を透かした透明なオレンジ色の卵が無数に生みつけられ、次第に育つて孵化してゆく美しい幻を、ほんやりと見たような気がした。

「さてと、疲れしましたな」牧田画伯が、一同を見渡した。

「あんたじゃないが、老人に長旅はこたえるね。そろそろ、お茶にしますか」

すぐ下の道を、黒い革ジャン姿の数人の若者たちが、喋りながら通り過ぎてゆく。背中に背負っているのは、ギターだろうか。

「でも、こんなごちゃごちゃした街だからこそ、面白い役者や、個性的なミュージシャンが育ってきたわけですよ」と羽木務。

「そういうこと。巨大なコンクリートの谷間からは、何も生まれんですよ」と澤田。「ストレスと疎外感を溜めこんだ凶暴な犯罪者、以外はね。それに、利益主義のコンセプトで再開発した二子玉川だつて、いまや人が来なくなっている。おいしい思いをしたのは、土建屋と政治家と天下り官僚だけ。そういう利益誘導ではなくて、才能をインキュベートする町だつて、あつていい」

「な、なんだつて。インキュ？」と、マスターが聞き返す。「インキュベーションというのは、孵化のことです。つまり、アートや創造的才能を育て、孵化させる保育器、孵化器。もしくは揺り籠ね。それがいまの下北沢の役割じゃありませんか」塾教師は、目を伏せたまま、後ろ手をして、にんまりと微笑んだ。

「……才能を、孵化させる町か」羽木は頷いた。

ギターを背負った革ジャン姿の若者たちは、駅の北口階段へと消えていった。

「まあ、そだな」頭でつかちの塾教師をやり込めたくてた

画家は、ステッキの老人に振り向いて微笑した。

さつきから居心地悪そうに、黙って会話を聞いていた小太りの江戸っ子は、ぎこちない笑顔を返した。羽木は二人の表情を見て、何となく嬉しくなった。

## 5

路地から路地へ。壁の間を通り、その奥の細道へ――。

どこをどう巡ったのか、羽木務は見当がつかなくなつてきた。疲れたといつておきながら、牧田画伯は他のメンバーなど一向に介しないような表情で、すたすたと歩き続けた。虚無僧のように、愛想がない。

落書きだらけの壁。黒蛇の巣のように絡まり合った雑居ビルの配線。狭い通路の青空。似たような風景が、何度も現れた。何だか半径数十メートルの迷路のような区域を廻っているような錯覚に陥ってしまう。

「ではここで、休憩します」

そういつて、牧田画伯が指差したのは、小さな細い路地の行き止まりだった。

前方には、蕨の這いまわる陽当たりのよい壁が見える。一行が進んでゆくと、かすかに小鳥の啼く声が聞こえた。

そして、緑色の蕨の葉に蔽われた、古びた木の看板が見えた。

## 『閑話茶館』

緑の壁面の手前まで来ると、右手が急に明るく開けて、不思議な空間が広がっていた。それはがらんとした簡素な中庭だった。

小さな池の奥に藤棚があり、紫色の藤の花がひっそりと垂れている。色褪せた木の露台があり、簡素なテーブルが春の陽を受けて並んでいた。露台には、鮎色の大きなどっしりとした壺がある。奥は、店のような構えとなっており、薄暗い中にカウンターのようなのが見えた。

とりわけ印象的なのは、軒先や木の枝のあちこちに吊り下げられている大小様々な鳥籠であった。青紫や黄緑色の羽をした小鳥たちが、竹籐を編んだ繊細な工芸品のような籠の中で、美しい声で啼いている。その声が何ともいえない華やぎを与えていた。

晩春の昼下りの日射しを受けて、池面はなめし革のような鈍い光を帯びて、ゆるやかにゆらめいている。

光は白い漆喰壁に、けだるく照り返している。

水草の藻がときおり揺れるのは、水の中の鯉がつつくだめだろるか。水面では、大小のアメンボが、細い脚を張ってじっとしていた。まるで時間が止まったような空間であった。下北沢にこんな所があるとは、羽木務も聞いたことがない。

藤椅子に横になっていた人物が、顔に被せていた本を置

き、むっくりと体を起こした。

「おお、ご到着ですか。おひさしぶりです、牧田先生」丸顔の小柄な老人は、にこやかな笑いを浮かべて、一同に挨拶した。

「お元氣ですか、候さん。ご無沙汰してます」画家は、キャップをとって挨拶した。「この連中に、お茶を飲ませてやってください」

「かしこまりました。皆様、いらっしやいませ。ただ今、飲茶の用意をさせます」

候老人は身を屈め、歓迎するように手を差し出す。

「さ、さ。どこにでも好きなように、座ってください。奥にも椅子がありますから」

老人は、肌の色つやが良く、まるで大きな満月のような黄色い顔だった。

彼が「アイリン！」と叫んで、ぱちんと両手を打つと、すらりとした若い女性が、はにかむようにカウンターに現れた。薄くて白い清楚なチャイナ服姿だ。

しばらくすると、中国茶の道具一式をそれぞれのテーブルに設えた。そしてかすかに笑みを浮かべつつ、しなやかな手つきでお茶を淹れ始めた。

「候さんは台湾の方でね、日本や中国を行ったり来たりして、貿易のご商売をされています」と牧田画伯。

枝垂れ柳の木が、陽光を受けてゆるやかなS字を描き、

水面すれすれに数本の枝を垂らしている。

細い鎖のような葉を透かして、金緑色の光がにじむ。

「台北や上海にも幾つか家があるという、大変なお金持ちです。私も数年前、その豪邸の一つに泊まらせてもらったことがあります。断崖絶壁の上から遙か東シナ海が見渡せるといって、何とも広大な邸宅です。東京にもこうして時々やってくる。この茶館は、開いている時と、閉じている時があり、今日お茶を飲める君たちは、とても運がいい」

「徳のある方だけ、私のお茶は飲むことができます」

候老人は狡猾そうに、にっこり笑った。

「いまこの娘が淹れているのは、阿里山にある私の茶畑のお茶ですね。標高三千メートルに近い村です。昼と夜の寒暖の差が大きいので、美味しいお茶が採れる。一煎、二煎、三煎……。どうぞ、何杯でも何杯でも、ゆっくりと、心ゆくまで楽しんでください」

藤棚に吊された籠のカナリアが、素速く向きを変え、露台の影模様を変化させていた。

「ほんとうに、素晴らしいお庭ですわね」女性区議が、感に堪えたように辺りを見回す。「このお店で、私の講演会とか、開けるかしら」

「残念ながら」と候老人は、悲しそうな顔をした。「ここは、無駄話、閑話、役に立たない話だけ、オーケーね。お

金になること、政治の話、企業のやり口、世の中に有用な

こと、そういうことを話すと、この場所は煙のように消えてしまいます。ここは、無用の場所、無為の庭」

黄色い丸顔をした老人は、ふっと、謎のような笑みを浮かべた。

羽木務は、御厨女史やロシナンテのマスターと三人で、池に近い木のテーブルを囲んでいた。

「あのアイリンちゃんとかいう素敵な子、何者かしらね。孫でもないでしょう？」

御厨女史は、照れ隠しのように話題を換えて、羽木にささやいた。

「さあ、向こうから連れてきたのかなあ。それとも留学生なのかな」

「ひよつとして、若すぎる愛人か。あの台湾美人」と、ロシナンテのマスター。「柳腰というのは、ああいうのをいうのかねえ。隅に置けんぞ、あの爺さん」

牧田画伯は、目を細めてお茶を啜りつつ、無言で彼らのやりとりを楽しんでいる。やがて気分よさそうに、パイプを取り出し、火を点けた。

他のメンバーには相手にされないと思ったハンチングの老人は、韓国人カップルをつかまえて、藤棚の下のテーブルで話し込んでいた。ステッキを斜めに立てかけ、身を乗り出すようにしている。

二人のソウルっ子は、多少迷惑そうな顔をしていたが、儒教的な律儀さからか、生真面目に老人につきあっていた。

白ナマズは、相変わらず一人無言で、携帯電話のカメラで風景を撮影している。面白くも何ともないという、無表情で事務的な顔であった。目だけは刺すように鋭い。

しかし時折、牧田画伯や、候老人にもカメラを向けているのを、羽木は見逃さなかった。

このアジア的とも西洋風ともつかない奇妙な中庭は、ほぼ正方形で、四方が他の建物の背中になっていて、灰色のコンクリートの壁や、びっしりと葦の被う緑の壁面、古い赤レンガの壁で囲まれていた。西側の壁際には、小さな赤い薔薇や、さんざしの白い花が微風に吹かれていた。

ふと見ると、どこから吹かれてきたのか、黄色い蝶が二匹、もつれ合うように戯れている。光の中で、くるくると回り、金のリングのように見える。さつき教会の庭にいたのと同じ黄色い蝶々のようだ。まるでどこか見えない近道があつて、こちらに飛んできたようにも思われた。

「あの、質問していいですか」羽木務は、茶碗を置いた。

「どうぞどうぞ」

「ここも、幹線道路、五十四号線の工事によって、なくなつてしまふのでしょうか」

「そうです。そうです。皆様が、このような場所を欲しな

戯つぽくボンと叩いて、呵々大笑した。

池面にたゆたう光に照らされながら、まるで長年の同志のような二人の老人は、椅子にゆつたりと座つたまま、しばらくの間、愉快そうに無言で微笑んでいた。

再び優雅なアイリンが、背筋をのびした品の良い歩き方で、それぞれのテーブルに飲茶の菓子を運んできた。

室内ではバロック音楽が低くかかっている。

雑草や苔は伸び放題といった有様だったが、沈んだ色彩が程良く調和している。忘れられた庭園のような、それでいて荒れたところのない閑雅な空間であつた。

一同は、時間の静止したような庭の中で、お茶を何杯も啜り、ゆらめくような池の光に目を細め、幸福な気持ちになつた。太陽光線の中に虹色の粒子がまじっているような、静謐な午後のひとときであつた。濃いオリブ色を帯びた池が、鯉の動きとともに、ゆつたりと光を放つ。

ここにいつの日か、パワーシヤベルやクレーンが乗り込んで来るなど、まるで考えられなかった。

「そろそろ、上へと、参りましょうか」と、候老人。

「今日は、いいのではないですか」なぜか煙たそうな顔をする牧田画伯。

「いやいや、先生もぜひ」

二人の間でそんなやりとりがあり、画伯は苦笑いした。

「私は、ここでパイプを燻らせていますよ」

ければ、それは当然、なくなります」

「ええっ？ では、望めば、存続するということですか」

「それが、宇宙の摂理です」

候老人は、涼しげにいつて目を細めた。「しかしね。いざという時は、この庭全体を池ごと、そこにある壺に吸い取つて、私は羽化登仙。我眉山にでも逃げよ」

『閑話茶店』の老主人は、腹を抱えて、ホッホッホと笑つた。

水面のゆらめく光を受け、鉛色に輝いている大壺を、誰もがあつげにとられて注視した。

「なんだかまるで、老子みたいな人ですねえ」

感銘したように、澤田がいった。

「ここは、下北沢の風水の中心ね。微妙な諸力が、ちょうどその辺で」と、老人は柳の脇の中空を、芝居がかった表情で、ゆつくりと人差し指で示した。「組み合わさっている。ここで皆様が意識したことが、周囲の環境や未来を、大きく変えてしまふ」

「ふふふ。あのね、君たち。あまり候さんのいうことをまともにとると、とんでもないことになるぞ。ほどほどにした方がいい。この人、台湾の導士、魔法使いだから」にやにや笑いながら、牧田画伯がいった。

すると候老人は、ゆるゆると手を伸ばし、画家の膝を悪

「では、先生以外の皆様……ご案内いたします」

候老人が手招きをするので、ツアー一行は奥の室内に入つた。

床が黒光りするような、しんとした廊下の右側、観葉植物の背後に階段が見える。

二、三段進むと、候老人は、薄暗い階段の途中で、また意味ありげに、おいでおいでをする。その目つきは、いささか不気味な光を帯びている。

羽木務やマスターが階段を上ると、立派な額に入った油絵が壁に飾られていた。

それは、木陰の下で食事を嗜む人々の姿であつた。

木洩れ日が、男女の肩に黄色や紫色の淡い斑に射している。閑静な住宅街の中のフレンチ・レストラン。

これはどこかで見たような風景だ。

そのすぐ斜め上には、『下北沢スズナリ劇場』とあつた。十号くらいだろうか。曇天の下に小劇場の特徴的な建物が、筆の跡もあらわな荒いタッチで描かれていた。

その隣には、劇場周辺の猥雑な飲屋街を描いた作品。ユトリロやブラマンク、佐伯祐三など、エコール・ド・パリの画家たちの懐かしい画風に似ていた。さらに階段を昇ると、金縁の豪華額に『カトリック世田谷教会』の白い建物。

その隣に『洞窟の聖母マリア』。

羽木務は、ここで目が、釘付けになつた。



いつか破壊されることを知っているあの白い聖母。両手を祈りの形にして、天を仰ぐマリア。まさに受難の聖母ともいふべき、美しい一枚だった。

彼はほとんど宗教画を前にしたかのような強い感銘を覚えた。

「ひょっとして、牧田先生の絵ですか、この作品」

羽木務はいった。

「その通り。巨匠は照れて、こちらにいらつしやらない」

店主は、静かに微笑んだ。

「そうか。今日、歩いてきたところが、ぜんぶ絵に描かれているわけね」

美人区議が、口元を押さえるようにして、叫んだ。

「私は、牧田先生のコレクターね。これまでに、パリの街角の絵を含めて、三十点は持っている。代官山や表参道の同潤会アパートを描いた絵も、傑作です。失われた風景をいとおしむ気持ちが、よく出ています。あのセンセイ死ねば、この作品、ゼーんぶ値があがるよ」

満月のような顔をした候老人は、破顔一笑した。

『駅前マーケット風景・夏』『ピリヤード場にて』『レディ・ジェーン之夜更け』『夕暮れの代沢三差路』『JAZZ喫茶マサコ』『露崎館』『アンティーク・ショップ』『深夜のマザー』『茶沢通りにて』『秋のプロテスタント教会』。

うな気持ちだった。

「まあ、こんなに路地裏がいっぱい。じつに不思議な迷路ねえ、この街は。あちこちの水路で、藻や岩に隠れながら、色とりどりのお魚たちが遊んでいるようだよ」

欄干に両手をつき、高揚した御厨女史が、歌うようにいつた。

小田急線が低い憂鬱な音を響かせて、滑るように走行している。

遠方では、夕日を受けたガラス窓が、金の板のように反射している。羽木は、目の前に広がる風景が、なぜか遠い記憶のようにも思われた。迷路のように巡る路地という路地に、林檎酒のような夕陽が射して、いたるところに金色の蜜の流れが輝いているようであった。

《路地裏ツアー》の一行は、まるで龍宮城か桃源郷から戻ったような奇妙な虚脱感に浸っていた。候老人とアイリンが、手を振りながらこちらを見ていたのは覚えていた。しかしあの庭からどの路地を通って、ここまで来たのかかわからない。皆はただ、牧田画伯の後をついてきただけだった。もう一度、『閑話茶館』を訪れようとしても難しいかも知れない。

たまたまあの場所に出くわしても、空地の中にあの趣のある鉛色の壺が一個ころりとこころがっているだけ、なんて

下北沢の特徴ある建物や、街並みの絵画作品が、白い壁一面に飾られている。かつて存在していた建物や、これから壊されるかも知れない建物。街の匂いや歴史までが、いつくしむような筆遣いで描き上げられていた。

一同は候老人に促され、二階の部屋を横目に、さらに階段を上がってゆく。上の階からさらに上の階へ。それはまるで、天空に向かって縦に作られた路地のようでもあった。

「ここが、わが閑話茶館の最上階です」

ツアー一行は、楼閣のような建物の欄干に出た。

——目の前には、東京という都市の天空が広がっていた。遠く新宿の高層ビル群が、蜃気楼のように青く霞んでいる。

西の空いっぱい、赤あかと夕陽が射して、赤紫色の雲が浮かんでいる。街の屋根屋根は、金色の光を帯びたおびただしい鱗片のように染まっていた。小さな無数の路地が見える。垣根や、軒や、看板や、洗濯物。古着屋のディスプレイは、まるで極彩色の花壇のようだ。そぞろ歩きをしている若者たち。彼らの長い影。自転車。バイク。店の呼び込みをしている店員たち。ショウウインドウの中のハイヒールや、エナメルバッグや、帽子の類。

これは錯覚なのだろうか、三階建ての建物にしては異様に高い気がする。まるで雲の上にいるような、夢の中のもの。

ことにもなりかねない。

歩き疲れた彼らは、ビールでも飲んで、簡単な打ち上げをしようという話になった。

仕事控えている羽木務は、申し訳なさそうにマスターに頭を下げた。彼としては、閉じ籠もったままパソコンに向かう気詰まりから、何とか解放されたかっただけであった。スケジュール通りならば、今夜は徹夜になるかも知れない。

「残念だなあ、みんなにウチに来てもらって、一杯やろうと思っただのに」

「いえ、また今度、そういう機会もあると思いますので」

「ロシナンテには、あたしもしょっちゅうお邪魔するの。この人、カクテルの腕前、最高のよ。ぜひ、いらつしやいよ」と御厨女史。

「そうですね。場所は先程教えてもらったので、すぐわかると思います」

「あ、そうだ。大事なことを忘れてたわ」女性区議会議員は、そそくさと名刺とパンフレットを取り出して、羽木に渡した。「次の選挙、よろしくね」

大きな顔写真入りの派手なパンフレットだった。

「そのうち、私、都議に打って出るかも。やっぱり無力よ、区議会議員じゃ」

「代議士だろ、本音のところは」と、マスター。

「まあ、厭なヒトねえ」御厨女史は、店主のたくましい胸板の脇を、指でつねった。  
羽木務がパンフレットを読んでいると、不意に肩をつつかれた。

「最後に一枚、撮ってもらえますか」

朴と金の二人連れが、申し訳なさそうにデジカメを渡してきた。またしても二人は、いきなりぎゅっと頬を寄せ合いい、笑顔でVサインを作った。

「はい、チーズ！」下北沢駅を背景に、二枚撮った。

「あの素敵な庭で、撮りたかったよ。でも、あのお爺さん離れなかったですよ。日本の年寄り、しつこいね」女の方が、不服そうに口を尖らせたので、羽木は笑い出した。

彼氏の方は、慌てて「シーイッ」と口に指を当てた。

ずんぐりとしたハンチングの老人は、誰かが声をかけてくれるのを、それとなく待っているようでもあった。

羽木は、最後に牧田画伯に挨拶した。

そして白ナマズの方を見て、「あの人、ずっとツアーのメンバーを撮ってましたよ」と小声で伝えた。

白ナマズは、やや冷ややかな距離を置き、手持ちぶさたのような顔つきで、空を見上げ、見下ろし、やはり無言のままで佇んでいた。

老画伯は「知ってます」といった。

「スパイだよ、あの男。市民運動を監視している。妙など

ころでメモばかりしてるし。普通の参加者が反応しないよ  
うなところだね。我々一人一人の顔写真も撮っている」  
「やっぱり。そうだろうと思ってました」  
羽木は唾を飲んだ。

「背後は、どっちですかね。デベロッパか、電鉄か、行政  
隣で腕を組んで聞き耳を立てていた澤田が、目配せをし  
た。

「だいたいの見当は、ついている」

牧田画伯は、そういつてから、一日の用を終えた緑色の  
旗を、ゆつくりと巻き付けた。

その落ち着きようは、夕暮れにももむろに槍を手仕舞う  
古武士のような風格があった。

羽木務は、駅前でバー『ロシナンテ』に流れる一行と別  
れた。慌ただしい駅前雑踏は、次第に青い夕闇に沈んで  
いった。

小田急線の喜多見方面に向かおうとして、駅のプラット  
ホームに立つと、長身の白ナマズが、階段脇の人混みの中  
にいるのに気がついた。

羽木務はぎくりとし、相手に気づかれていないことを確  
かめた。白ナマズは、携帯電話で話し中だった。電車の出  
入りの音がうるさいためか、片耳を手で覆っている。

その横顔は、表情に乏しい、冷酷な尼僧のようだった。  
「——そうです。ええ。合計八名参加。リーダーは、牧田  
徹吾という例の絵描きの爺さん。ミクリヤ？ ええ、今回  
は区議も来ています。すいません、そこはまだ不明です。  
その辺は調査中ですので。はい、了解。まもなくそっちに  
戻ります」  
羽木務は、相手に気づかれないように、反対側を向き、  
そのままバッグから文庫本を取り出して、立ち読みするふ  
りをした。

列車が滑り込み、構内が暗くなった。ドアが開き、目つ  
きの鋭い白ナマズが、大股で乗り込んだ。  
羽木は一電車遅らせることにした。

(「カブリチオ」31号より転載)



草原克芳  
くさはら かつよし

1956年宇都宮市生まれ  
中央大学文学部中退  
広告代理店、制作プロダクション、通販会社に勤務  
文芸同人誌『カブリチオ』編集発行  
世田谷文学賞受賞(第13回「ドラキュラのいる客間」第14回「夏草の酒」)  
作品に『プラハの人形遣い』『建築家の檻』『アスペラトゥス雲』『庭師と四人の女たち』『人間ポンプの女』などがある  
評論『地下生活者としての夏目漱石』『砂の女』と『箱男』他 インターネットではGrasshouseの名で電子書籍を公開

**佐山広平**  
詩集  
**水の流れに**  
文芸思潮現代詩人賞に輝く詩人の  
第三詩集  
みずみずしい言葉  
光る感性のきらめき  
真の詩の言葉がここに結晶

**アジア文化社**  
1500円+税  
御注文はアジア文化社まで

小説と評論

# カプリチオ

東京都

奇想曲・狂想曲

あやしくも、物狂おしい二十年

今年で二十周年を迎え、秋に発行する雑誌で38号を迎える。現在会員五〇人。「カプリチオ」の発行は不定期で、年二冊から三冊である。旧態依然としたこれまでの同人誌からの脱皮を図って、「リトルマガジン」的に特集に力を注いでいる。

古いところでは「タルホ感覚嗜好症」と題した稲垣足穂特集。「三島由紀夫と戦後アプレゲールの悪童たち」のタイトルで三島特集。近年では「私小説は誰を刺すか?」、「古本屋のアルケオロジ」、「新宿ゴールデン街が見ていた戦後日本」、昨年は、東北大震災を意識した「いまだからこそ再会したい夏目漱石」の企画を実現した。歴史探訪と称して、佐倉惣五郎や、『大菩薩峠』の裏宿七兵衛などを扱った。短編・エッセイ特集も、不定期に企画してきた。

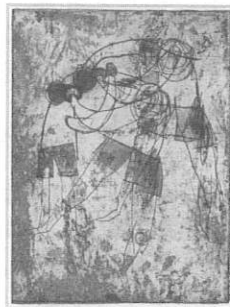
小説・評論は、しばしば『図書新聞』、『週刊読書人』などでも取り上げていただく。かつての『文学界』では、何度も掲載作品が論評されたものだが、その同人誌評コーナーもいまはなくなってしまうのは、なんとも淋しいも



カプリチオ例会でのスナップ

## 小説と評論 カプリチオ

2009年冬 第31号



「下北沢路地震ツアー」  
草原克芳  
「聞いている扉」  
萩悦子

のである。出発当時は、比較的若いメンバーと自負していたのが、この二十年の間、多少の新陳代謝をしながらも、腰を据えて書いている書き手は、すでに若いとはいえなくなった。もちろん、精神だけは依然として若いつもりであるし、二十代三十代の書き手も歓迎である。

雑誌発送は、時間の許す者が随時集まり、手作業で一冊一冊、丹念に封筒に入れ、宅配便のシールを貼っている。合評会はいまのところ、JR田町駅近辺の会場で、出席者数は毎回二〇人前後。これはかなり白熱する。中には「合評会は、格闘技」などと称する不謹慎な者もあり、以前と比べて理論家が多くなった。一次会がそんな調子だから、アルコール混じりの二次会がどんなことになるかは、ご想

像に任せる。一方では、世の中全体に、小説をじっくり書く、文学の香気あふれる密度高い作品を書くという、いい意味での「小説職人」が少なくなったようにも思えるが、どうであろうか。

雑誌名の「カプリチオ」は、奇想曲・狂想曲という意味のイタリア語 capriccio で、十七世紀の音楽用語である。「悪魔のトリル」で有名な天才バイオリニストのバガニーニの曲にも、斬新な奇想曲がある。最近「狂」の字が差別語だということで、音楽業界でも「狂想曲」という言葉は避けるらしい。しかし、こと文学の世界ぐらいいは、人間の内なる「狂」を、作品という形で表出すべきではないだろうか。「あやしうこそものぐるほしけれ」(『徒然草』)の境地を排せず、動脈硬化した日常を別のまなざしで凝視してこそ、精神の健康は保たれるはずである。雑誌「カプリチオ」は、内なる思いの、怒り狂いのたけを込めた多彩な小説が百花繚乱の妖しい花園でありたいと願っている。

(編集委員) 谷口葉子

小説と評論 カプリチオ

一都文学の会

TEL56・0044

東京都世田谷区赤堤1・17・15・101 草原克芳

連絡先・事務局 TEL150・0022

東京都渋谷区恵比寿南1・21・8

TEL03・3713・7962 塚田吉昭



鏡が湖うみ

市尾卓

電車は、樹林の繁茂した崖の露わな山蔭に停まっていた。車窓の一方の側は、田んぼの陽だまりが望める駅舎に見えた。その小さな駅舎の改札にも、ホームにも人の影は見えない。無人の駅らしく降りる人もなく、乗ってくる人もいない。電車は停まったままだが、ホームや駅舎の向こうは田んぼの荒れた黒土が、延々と続いている。広々した田んぼに陽が差して遠くに連山が見渡せる。

「いったい、ここは、どこか、なんというところなのか、ホームのあちこちに駅の名を探してみた。地名にこだわりのを不思議に覚えながら探していると、「鏡が湖」(かがみがうみと振り仮名がしてある)の看板がホームに見えた。そこに名所案内の説明があつて「日本夕陽百選」とある。

絶景の夕日が見える名所のような。この湖には、背後の山に鶯が棲んでいて、湖上にかぶ夕陽は、格別の美しさだと誌されている。古来、落陽の美しさが讃えられたところとして名をなしているのだろう。

電車は、そこで停まったまま動かないようだった。電車が、動こうとしないと思っているとき、私は夢をみていたのに気がついた……。

夢というのは、こうして書き留められたときには、もう夢でないものになっている。それにしても、なぜ、こんな湖畔の小駅に停車中の車内にいる夢をみたのか……。実は、「鏡が湖」の所在は、むかし、宏子に聞かされて

知ったのだが、あのころ、この湖が、日本の夕陽百選のひとつだ、などというのに、だれも思いおよばなかっただろう。

私は、宏子から聞いたこの湖を想いだして、最近訪ねたのである。遠い記憶にみちびかれるように訪ねてみたが、そのおりの湖畔の小駅らしい夢のような。宏子をめぐる記憶が、よほど忘れられないのだろうか。

郷里の子ども時分の友人で、在京の医学生であつた原和夫の下宿を訪ねて、この「鏡が湖」の話聞いたのは、ずいぶんむかしのことである。

そのとき、原の下宿を訪ねるのは、二度目だったような気がする。そこで徳島で医院を継ぐ原の長兄の嫁の宏子に、思いがけず出会ったから愕いた。木造アパートのドアをノックすると、容色じろの着物姿の似あう宏子が、下宿の狭い部屋に膝を崩して原のジャケツを編んでいた。前触れもなく訪ねた私に、宏子は、ちよつと愕いたけはいを見せ、私も、さすがにそこに宏子がいるのにびっくりした。そんな宏子は、

——和夫さんは、いま、外出しておりますの。

と、持ち前の男好きのする容色をたたえて挨拶をかわした。狭い田舎町のこと、まったく知らない間柄でもないから、私は、予期しない彼女との出会いに、あれこれと話し

はじめた。宏子は、婚家を捨てて義弟の原を追って上京して間もないころのようであつた。狭い一間では、食器をとるにも窮屈そうに宏子は腰をひねって応接しなければならぬ。宏子は、いそいそと部屋をでると、共同調理場へ往つたりもどつたりした。

間もなく、和夫が帰って、テーブルをかこんだときを私は、いまも忘れていない。

——宏子が、献立をならべてテーブルで話しはじめた。

——廊下でね、いま、あの方が出かけていくのに出遭つたのよ……。

宏子は、すずしげな眼ばたきをして、原に言いかけた。

原は、それには応えようとせず、箸を動かしている。

——ねえ、聞いているの？

——うん……。

そう応えて、黙っている原を宏子は媚びをふくんだ視線でみやつている。なんとない安らいだけはいが、二人の間に流れていた。和夫は、宏子の話に関心をしめさないが、兄嫁だった年上の宏子の、満ち足りた大様さがあたりに漂っている。宏子は黙りこんでいる原にかわつて私にむかつて喋りはじめた。

——わたし、ここへきて、やっぱり東京だなあつて思ったの。

宏子が、さも愕いたように話を切りだした。

下宿の隣室の男は、夜ごと、硬貨の山を畳にひろげ、うるさい音をたてて、それを算<sup>た</sup>えている。そして、男は、昼過ぎになると、傷病兵の白衣に身を装い、片手に茶いろの皮革の保護具を着けて、松葉杖でびっこを引きながら、出かけていくという。大戦後、山手線の車内や駅頭で、しばしばみかけた、復員傷病兵に身をやつして日を送る男が隣室にいて夜陰にまぎれて収穫の高を畳にひろげて騒がせているというのだ。たまたま、部屋のドアが開いて、男が保護具を傍らに、布袋から硬貨を畳にひろげているのを宏子がみかけたらしい。

「いまも、顔を合わせたけれど、なんだか、ごつごつした怖い感じの人なの……」。

宏子は、言いながら着物の袖をからげて食器を原に差し込んだ。宏子の手の甲の、ぼつてりした膨らみと繊やかな指を、私は眩しげに見やっした。

原は、隣室の男の話にはさほど興もおこらないように見えた。疑うことを知らないような宏子には、男が隣にいるのをかなり負担に感じるらしい。しかし、原が、宏子ほどには隣室の男に関心をみせようとせず、聞き流していたのが、いかにも、彼らしい反応だったような気がする……。

私は、ときおり、原の下宿を訪ねては、物のない頃の、在り合わせの宏子の手料理を馳走になったりした。彼女の周りには、乏しいながらも原と暮らしはじめた満ち足りた

華やきがただよっていた。

このころ、原は郷里から学資の仕送りも途絶えて医学をあきらめ、フリーで映画の仕事をはじめていた。コマースヤル、教育や広報番組の制作と忙しく、ロケにでると帰らない日もあるようだった。彼は、郷里や友人との縁も断ち、寄る辺ない慌しさに安らぎをもとめているふしにも見えた。

そんなある日、私は、久しぶりに原を訪ねたことがあった。が、その夜、原は、いつまで待っても帰らなかつた。

彼は、変わらずに忙しい日々を過ごしているようだった。宏子は、原がロケ先にいるのを知っているから、さほど気にもかけていないように見えた。彼女は、原との暮らしぶりや帰郷した徳島の話などをして聞かせた。徳島へは、実家の荷物の整理などで帰ったようだ。中学生のころ、年上の女学校の生徒だった彼女は、顔見知りでもあったから、つい話も弾んだ。

徳島の話をして、これからの暮らし向きを楽しげに喋った彼女が、不意にワンピースの裾をおさえて立ちあがった。彼女が、狭い一間の頭上の棚に手をのばし、一葉の写真をとりだして見せた。

「ねっ、これっ、この前、私たちで行った湖なのよ。」

彼女は、うれしそうな笑みを浮かべて、湖畔に佇むっ

ショットの写真を私の手のうえにおいた。

「これ……私たちの新婚旅行っていうのかな……」。

「どこですか。ここは……」。

「ここは、ねえ……鏡が湖<sup>かがうみ</sup>っていろいろの」。

宏子が、思い入れ強く、とてもいいところなの、と繰り返した。

「あんまりよかつたせいかしら、私……ちよつとしたアキシデントをおこしちゃつたのね……」。

そういって、彼女は遠くをみるような眼遣いで顔をあげた。

「原も忙しいけど、きてよかつたって言ってくれたの。無理をして時間をかけてきただけのことはあつた……」。

湖は、国鉄を私鉄に乗り換えて、夕暮れに着いた、寂しいところだったと言う。駅裏は、険阻な山塊の山蔭になって、駅に着くと、辺りの薄暗さは、なんとも言えず心細く寂しかったらしい。

湖のほとりのちいさな宿に泊まり、彼女は、朝早く原が寝ている隙に起きだして湖畔にいった。独りでほとりを歩いたようだ。夜明けの湖は、なめらかな水を湛えて、湖面は鎮まりかえっていた。水辺に佇むと、水底の小石が、陽差しの筋をきらめかせて透けて見える。底砂の透明な粒子が映えているようだった、と言う。そして、彼女は、つづ

けた……。

水底がきれいだから見惚れていたら、ふと翳りが射して湖面のうえをなかが掠めたの……頭上に風をきる羽音がして、愕いてふりあおぐと湖を鳥影が遠ざかっていくの……。

宏子は、そういつてひと息つき、私の手のうえの写真を覗きこんだ。写真のなかのふたりの背後には、湖畔の水辺が広がっている。

「この写真はね、宿を離れる日に湖畔で写したのだけ……」。

そう言つて写真を見せる宏子は、傍らで額の生え際に汗のしずくを浮かべている。

あの朝ねえ、水底に鳥の翳りが映ると、その翳りが、ずつと消えないから妙な気がしたのよ。

宏子は、そう言いながら、ひと息ついて写真を私の手からテーブルのうえにおいた。急きこむように喋った宏子はワンピースの胸元をおおきく弾ませていた。原の帰らない、蒸し暑い夜のひととき、彼女の話は、終わろうとしない。

原がいたら、宏子が鏡が湖でのことをあれほど詳しく話したかどうか、わからない。原は、そういう話をくぐく聞きかせる男ではなかつた。

湖畔の水底に暗い翳りをみていた宏子は、そのとき、眼の前がぐらぐら動きはじめるのに気づいたらしい。彼女

は、思わずその場にうずくまって屈みこんだ。彼女は何か起こったのか、よく解からなかったようだ。

宿では、この朝、湖畔に倒れていた彼女を行方知らずとして大騒ぎになったらしい。

——突然、気が遠くなつて、湖岸にしゃがみこみ、そのまま横たわつたの……。貧血のようだったけれど、ひどく気持ちよく意識が遠のいていくようだったの。なにかうつつりするような気分で見えなくなつて……。――

宏子は、臆面もなく、そういつて旅先の不意の出来事を喋つたのであつた。

原の留守にことよせて、彼女にしてみれば、一期の旅の想い出を思う存分に聞かせたかつたのだろう。

当時、原が、映画の仕事に忙しく過ごしているのは、人伝に聞いていた。彼は頼まれれば、仕事を選ぶことなく引き受けていたようだった。兄嫁だった宏子と同居をはじめた原は、郷里に背いて都塵にまみれ、知己をしりぞけて忙しく過ごしているようだった。

鏡が湖の話を聞いて、半年ほど経つた正月明けのある日、私は、宏子の思いがけない手紙を受け取つた。そして、差出人の宏子の住所が徳島に変わつてゐるのに愕いた。手紙は、かなりの長文でつぎのように誌されていた。

宏子の手紙は、はじめて見る丸っこい手蹟で、のんびりした大様の彼女には似合わないものに見えた。

私は、会わなくなつた原のことを想つたが、宏子と別れて、彼がどんな暮らしをしているのか知るよしもなかった。

少年のころから寡黙な原は、感情を顕わさないおとなしさが周りを近づけないようでもあつた。なにかしら解らないところも感じられたが、このころは、往き来も絶えて彼の消息を知ることにはなかった……。

宏子が、徳島でちいさなバブのような店を開業したのは、何年か経つて、彼女の年賀状で知つたのだ。

私は、ある夏の夜、帰郷のついでに、その店に立ち寄つたのである。

店は、徳島の街を流れる川のほとりにあつた。間口の狭い店の裏口には、川面の緩やかな流れに夜の明かりが煌めき映えていた。なめらかな川面の揺れに、街の明かりがたゆたつている。時刻が晚いせい、客の絶えた店で宏子はよくしゃべつた。

——いま、よくいらつしやるお客さんが、帰つたばかりでなつ……。

宏子は、辺りを片付けながら、そういつて私を迎え入れた。

——その人は、酔いつぶれて寝てしまつてなつ、見ている

このたび、私は、原和夫と別れて、はじめてのお正月を徳島で過ごしております。暮れも押し詰まつて、こちらの病院で無事男の子を出産し、現在、実家の近くに住まいしております。原に女性がいるのを知つたのは、鏡が湖の旅から帰つて、すぐのことでした。あなたと鏡が湖のお話をした直後のことです。知らされたとき、鏡が湖の旅のなかに、おぞましい予兆をみていたような不思議な気がして、思い返したものでした。

あの湖畔の旅では、とても仕合せな昂ぶりのなかにいました。羞ずかしいことですが、私は、湖畔の朝露を踏んで悦びのなかに浸つていました。

突然の鷲の影に愕きはしましたが、そんなことは意に介さず、気持ちほど弾んで有頂天でした。私は、ほとんど前後もわからぬほどの昂ぶりのなかにいました。

そして、それが、なにを意味していたのか、私は知ることになりました。

あなたは、私の愚かさをお笑ひでございませうね。

でも、いま、私は新たな日々にかつて、あれこれとめぐらしているところでございます。いづれ、よいお知らせができるようにしたいと存じております。

こちらにお帰りの節には、ぜひお会いいたしたく存じます。

と、ときどき表情を崩して笑つたりするんよ……。ねえ、夢でもみていたのか、気持ちわるいじゃない？ つい魔が差したように怖くなつて、わたし、声をかけてその人を揺さぶり起こしたの。

私は、屈託なく話す宏子に、邪気のない、変わらない生き活きた日々を垣間見る思いがした。馴染んだ阿波弁で、カウンター越しには畳敷きの狭いひと間が見え、二つ折りにした座布団には人のけはいもあつた。宏子は、所得ていかにも楽しげに働いているように見えた。

——こんなお店でも、お客さんがいらして寛いでくれるようになったんよ……。

彼女は、馴れた手つきでビールをそそいだ。カウンターに椅子がならび、ほかにはテーブルが二つだけの、十人も入れれば満員になるだろう。化粧のない宏子の、ふっくらした若やいだ雰囲気は、歳月を感じさせるようには見えなさい。私が原の近況に口をすべらせたのは、郷里にいる気安さのせいだったか、長く会わない友人の安否に、私は、つい興を覚えたのだろう。聞いてみると、

——わたしが、知つてははずないでしょ。あなたに聞いてみたいくらいよ。

そういつて、宏子は、原の近況には、触れようとせず、別れる前後のことに想いがいくらしく、にわかには饒舌にな



った。

——過ぎたことを言っても仕方がないけれど、原に女がいると知って別れるまで、半年という歳月がかかったの。想いだすと、この六カ月は長くてつらかつけん、私なりに必要だったのかしら……。でも、原という人間は、ついに解らずじまいよ……。

宏子は、話しながら、水割りをなんどか口にした。彼女は微醺を帯びて言葉もなめらかになった。

——彼に、女の影がみえてからも、ときには、ねえっ……。なにを思ったのか、わたしを抱こうとしたりする……。そういうときの苦行というのか……。あれは男の人には、解ってはもらえんわね。できれば自分をころしても、と思つてみるけれど、女は、男の人とはちがうけん……。おなじ人に抱かれていながら……。それは、もう地獄や……。

宏子が、そういつて毒づいたとき、店の電話が、いきなり鳴った。彼女は、背後の食器棚においた受話器をとりあげ、背をみせて話しはじめた。相手は、店の常連のようで、話は長くなりそうな気がした。

まもなく受話器をおいた宏子が声をかけてきた。

——これから、来るつて言う人がいるんだけれど……。

——ああ、そろ、そろ、こちらも……。

——そういつて引き揚げようとした私に、宏子は新たな客をちよつと煩わしがるような眼顔をみせた。が、嫌がるどころ

るか、彼女は、棚からグラスをとりだしたり、来客の準備をいそいそとはじめるのだ。

——そんな彼女に、折を見て店をでようとすると、

——ねえ、ゆつくりしていつて……。ところで、あなたは、いまも、お独りなの……。

——彼女は、いきなり、こちらの現況に踏みこんできた。

——そう……。

——どうして再婚なさらないの。

宏子の無遠慮なもの言いが、会わなかった間の、こちらの事情も人伝に知っているらしい。原の下宿に往き来したのもむかしのこと、私もすでに不惑の齢で人並みにさる女と暮らしたが、相手は早ばやと空しくなつて何年も過ぎている。思いがけぬ宏子の言葉を聞いて、私は、いっしゅん無常の風が胸をよぎつた……。

——ねえ、おさびしくないの……。

——さびしくない人なんて、いるのかなあ……。

宏子は、上目遣いにこちらを見あげた。夏の夜の暑さに薄衣の胸元はだけて、あだつぼくみえる宏子は、どこかふてぶてしい落ち着きに見えた。

宏子は、グラスを唇からはなすと、また、ひと言つぶやいた。

——そんなら、ええけどなつ、あのひとのことは、解らないわ……。

彼女は、俯いて手許の台板をなでるようにした。

——学生の頃、原の下宿へは、なんどか訪ねたが、彼には、なぜか、それ以上、親しみを深めるようなこともなかった。

蒼白い顔で声を荒げることもなく、ぼそぼそ話しだす癖のある原には、確かに解かりにくいところがあるように思われた。だが、宏子のいう「解らない」は、彼女の想いがあつてのことだろう……。

——とにかく、女にだらしがないのかしら……。

——……。

——これ……男性には、ちよつと解らんわなつ……。

——そうだろうか……。

——私は、諦めたようにいつて黙るほかなかつた。

——原は求められて応えようとすると、口ごもったり、つと抑えたように口をつぐむ癖があつた。

宏子の店を訪ねたのは、このときだけで、以来、私は彼女の消息を知らずに過ごした。

——ある年の若葉のころの、よく晴れた日曜日であつた。電話の音に目覚めた私は起き上がつて、おぼつかないけはいで受話器をとつてみた。すると、年配の女性の落ち着いた声が聞こえた。

——突然、失礼でございます。私、徳島の伊丹宏子ともう

します。

——聞いて、私は、愕きに撃たれた。胸奥に眠つていたものが、いちどに眼を覚ましてくるような気がした。

——いやあ、ご無沙汰しております。

——私は、そういつたまま、なにを話してよいのか、とつきに言葉を失つた。年賀の遣り取りも絶えて久しく、宏子の声を聞かなくなつて、どれほどの歳月が過ぎてい

う、私は、なにか特別な用だなど直感した。電話のなかで、宏子も、ながの時空の向こうに往き来しているけいが察せられた。私は、呼吸をととのえ、冷静を装いながら、忘れていた彼女の、ねつとりした声のひびきに聞き入ろうとした。宏子が、控えめに喋りはじめた。

——原が、具合悪うて入院したので、病院へ見に行つていただけないか、というお願いでございます。たいへん不躰なことは、重々、承知いたしておりますが……。そして、どういう容体か、お電話いただけないかというお願いでございます。

宏子は、そういつてひと息いれた。急を要する口ぶりのようだし、交際の絶えた原への用むきは、尋常のものではなさそうだった。

——病院がなつ、あなたさまのお住まいのお近くのよう、ついで、こんなご無理をお願いしとるんでございます。なぜ、いま、宏子が原のことを……と思わないでもない。

——それで、原の入院は、いつのことでしたか。  
尋ねてみると、宏子は、原の妹から入院を聞かされたという。明け方、東京の病院から妹の許に原の緊急入院を知らせる電話がはいり、それが宏子に伝えられたらしい。電話をしようと思いついたのも、この原の妹と相談してのことだという。

妹は、郷里の実家と縁を断った原を案じて音信を絶やさなかつたのだろう。

私は、宏子の依頼で、ともかく原の入院先の病院を訪ねてみることにした。日曜日の朝の陽ざしが、病院の人氣な構内に明るく揺れていた。広場の葉桜となった樹木の蔭を踏んで緊急対応の入口へ急いだ。

原は、緊急外来で応急処置室に運ばれ、二人の当直医の蘇生術をうけているところだった。近寄っていくと、ベッドの傍らの心電図が、のっぺらぼうの横線を繰り返している……私は、なすすべもなく、枕元近くに佇んで看まもった。久しぶりに眼にする原の、白髪の混じる髭面、頬のこけた横顔の骨相に面影を見るものの、行きずりの見知らぬ初老のひとを覗いているようにも想われる。五十歳になつたばかりとは思えない衰頹した相貌に胸を衝かれた。

付き合いが途絶えて久しい原の最期に立ち会うのかも知れないと、一瞬、なにやら由縁らしきものを覚えた。が、

を生きる縁あるもののような気がしてきた。この刻に巡り合わせて、ともに生きてるように思えてならない、決して無縁なものではないように思われた。

そのとき、背後で声が聞こえた。振り返ると、バルコニーの扉をあけた看護婦が、陽ざしに眩しげな顔をゆがめて呼びかけた。

——ちょっと、先生がおよびです。

瞬間、私は、その意味を悟った。が、緊急処置室へもどりながら、不思議になにも感じようとしないうちにあるのに気づいていた。私は、どこかの筋書きのうえを歩いているような気がしていた。原の横たわる処置室に導かれ、救命処置のかなわなかつたことを告げられた。それから、年配の看護婦が、私を促して隣の小部屋へみちびいた。

——患者さんとは、どういうご関係でしょうか。

——友人です。

私は、小声でつぶやくように応えた。仔細を告げたいような誘惑にも駆られた。隣室の原のベッドから医師がはいってきた。看護婦が、原の身につけていた財布や持ち物類を机にならべた。表皮の擦り切れた財布があり、傍らの名刺入れに妹のものらしい徳島の住所と電話を認めた紙切れがでてきた。それらは、すでに持ち主を失った匂いがしていた。持ち主のない遺留品ほど、そのいのちを主張しているものはない。私は、それらをじつと覗きこんでいたが、

どこかに不当な気持ちもしていた。日曜日の安らぎや平穏がかき乱されたという、思いがけない居心地の悪さもくはない。友人の早い最期に、図らずも立ち会おうとしていること、そんな巡り合わせの疎ましさ、遣る瀬ないもの憂さは、日ごろの屈託にも重なったのしかかってくるようだ。どこかに腹立ちのようなものが込みあげていた。そして、私は、胸奥に広がる寒々した空しさに抗しきれずにいた。不当というより、眼の当たりにしている自分の役割を奇妙に思つて、予想もしない再会に落ち着きをなくしていたのだろう。

私は、たまたま、誰にもなく会釈して緊急治療室を後にした。廊下にでると、ガラス扉の向こうのバルコニーに陽が白く煌めいている。私は、そちらに歩きはじめた。予想だにしなかつた男の最期が、後ろから挑みかかってくる。背筋に張り付いてくるものを剥ぎとりたい気持ちで病室を遠ざかろうとしたのだ。バルコニーのガラス扉を開けて、外にでるとコンクリートにはじける陽射しが眩しい。陽光は、バルコニーにあふれ跳ねて、あちこちにスズメが戯れている。病院構内の大きなケヤキ樹は、葉を茂らせて濃い影をつくっている。スズメが、光と戯れながら、バルコニーの手摺りに群れ、跳ねては、さんざめく。彼らは、瀕死の男の病室の眼の前で恍惚境を奏でながら戯れている。ふと、このスズメたちも原と同じ時間のなかの、現在

長くは眼に留めることはできなかった。それらの持つている匂いの一つひとつが私を拒絶していた。原のすべてが、そこに籠っていたのだろう。

医師は、机上のものに眼を遣つて話しはじめた。原は、明け方、救急車で運ばれてきたとき、すでに危篤状態だったらしい。原が、重患のうえに末期症状にもかかわらず治療もせず、通院したけはないと言つて、医師は不審そうに首を傾げた。

——こんなになるまで、なぜ、病院にこなかつたのでしょうか……。

医師は、そう告げて、私の顔と机上の原の持ち物を見まわした。

——もつと早くこられたはずだけど……。

私は、かすかに頷くしかなかった。医師は、自殺の可能性さえほのかす言ひ方もした。

果たして、原が、医師の言うように治療を拒む道を選んだのかどうか。あえて、彼が、そういう選択をして死期を待っていたのか、どうか……。

世間には、単なる病院嫌いの人も多い。

治療の跡もなく、最期になるまで通院しなかつた原の心事は、どういうものだったのか……。一期の近いことを知つたときの彼が、病院を忌避していたのは瞭らかなようにも思われた……。私は、壁に架かつたカレンダーの日並び

に眼をやつて呆然と佇んでいた。

——どうなさいですか。このまま、ここにはいられません。お部屋をあけていただかなければなりません。

看護婦に促されて、私は自身の役割に気がついた。看護婦は、机上にならべた原の持ち物を掌で撫でるように隅に引き寄せ、紙封筒に移し入れた。隅の擦れた皮の名刺入れに財布、小銭入れと鍵類の、それらが、いやがうえにも不在の男の匂いを踵わしていた。

看護婦は、私たちもお手伝いしますから、地下の霊安室へ移動していただくか、葬儀社の手配もこちらでできますが……と催促がましく繰り返かえし言った。

病院の玄関ロビーにいくと、私は公衆電話を探した。目立たない扉の裏に隠れて電話機が静まりをみせていた。受話器をとると、徳島の宏子にむかつて原の経過を伝えた。黙って聞いていた宏子は、

——お世話になりましたわね、とんでもないお願いしてえ……。

——そういつて言葉を抑えて続けた。

——独り暮らして病院嫌いつていうから、こちらでは困つとつたみたい……。それが、入院したつて聞いたから、よつほどのことだろうつて、なっ……。

宏子は、そういつて原の容子を伝えて黙りこんだ。言葉

族ぐるみの運動会であるのに気がついた。どよめきは、遠くの波の音のように繰り返かえし聞こえてきた。

病院の裏庭は、樹林が茂り草むらが生い茂っている。原の妹の上京を聞いて、なにかな安堵はしたが、妙に落ち着かない……。

原は、いくら妹に勧められても通院しなかったようだ。彼は、ずっと独り身のようにだが、宏子と別れて、どう過ごしていたのか、解るはずもない。

受話器のなかの宏子の声は、どこか落ち着いたけはいに聞こえた。私は、ともかく妹の上京だけは確かめることができた。

原は、中学時代の同級生で数少ない在京学生のひとつりだから、いつとき、たがいの便宜を図つたりもした。日々を凌ぐのも、なにかと不如意をかこつ世相でもあった。

だが、彼は、どこか気を許さない頑なさをもっていた。深くは付き合いたがらない性向だったような気もするのだ……。

私は、院内をあてもなく、さまよい歩いた。原の妹の上京を、そうして待っていないが、つとめて他事に気を紛らせようとしていた。院内を二階に上がり、さきほどのバルコニーに向かう通路に出ていく……。いつとき、胸の裡に外気を摂りいれたいような気分が萌していた。窓の外は、

に詰まり、間をおいて、宏子は、原の妹が上京の航空便の手配を終えていると言った。

受話器をおくと、私は傍らの椅子に腰をおろした。疲れているのではないが、なにか居心地わるく減入つていく気分はとどめようもない。この数日の身の周りを想いだしても、今朝からの出来事は、意外で突出している。

通路の壁の時計は、午前十時を少し回っている。

日曜の朝だから病院受付の辺りは人気もなく、診察室への長い廊下や待合室も、明かりが消えて薄暗い。密やかに静まり、薄暗がり広がっている。窓際の床面が、陽射しに滑らかに光って薄明るい翳りがただよっている……。窓の向こうに老松の大きな幹が見え、近づいていくと、カマキリが窓ガラス下方の隅を這っている。窓下の草叢からのぼってきたのか、前肢の斧をもちあげると、ガラスの表面をすこし滑って、危うく窓の棧にとりついた。棧のうえをカマキリは、おもむろに肢を動かして、移動をはじめた。が、ついにガラス窓の下まで滑り落ちた……。草叢のうえに宙に取りついて、カマキリは、しきりに肢を動かすが、眼は、怯えているように見えた。

そのとき、遠いのか、そう遠くないのか、病院構内から距離感がつかめないが、ピストルの音が、聞こえた。それと同時に、ウオーというどよめきが、押し寄せてくる。しばらくして、そう遠くないところの企業のグラウンドの家

眩しい陽射しが、コンクリートのバルコニーに揺れあふれている。ガラス扉を押しひらくと、スズメが、いつせいに群れてバルコニーを飛び立った。そしてまた騒ぎながら、つぎつぎにバルコニーに下りてきた。ちゅつちゅつと騒ぎたてるのが、うるさいほどであった。私は、陽射しに足を踏み入れると、大きく息を吸った。

時おり構内の裏手の樹林の向こうから、風に乗って運動会のざわめきが聞こえていた。先刻は、ここで、そのことに気がつかなかった。聞こえていたが、聞いていなかったのだらうか。私は、不思議なほどよく晴れた空を仰いで呆然と佇んでいた。

しばらくして、地下に運んだ物言わぬ原に想いが赴った。

原の最期に出会ったのは、なにかの縁につながっているのだらうか……。おそらく、原は予想だにできなかったらうが、この出会いを彼がどう想うだらうか、尋ねてみたい気もしてきた。

午後五時を過ぎて、私は、病院の玄関へ行ってみた。日暮れて広い構内が薄暗くなりだしたところ、二人の人影がこちらに歩いてくるのが見えた。

正面玄関に近づいたのは、長身の細身の青年と傍らを小走りに随ってくる小柄な女性であった。女性は、私に気が





季節風

東京都

早大文学部の友人が中心

ものを書くのは無償の行為

同人雑誌「季節風」は、早大文学部の友人が中心となり、卒業の翌年、昭和二十八年（一九五三）六月に創刊した。創刊号は、大平正巳、小沢正義、恩地延久（河村延久）、鈴木亮一、中里秋光、花村守隆、御舟朋夫（高井有一）、藻才修三、市尾卓の九名で、発刊した。

翌年には、岡島春枝、三原誠、茂木照夫が加わり、季刊を励行して志気も高揚していた。友人の集まりだから、当初から自由な雰囲気、その後、同人が入れ替わっても、加入の新旧を問わず、隔てのない、おたがいの遠慮のない交流は、この会の特長といえるだろう。運営はすべて平等におこなっている。毎月の会合は、実に激しい討論がかわされたものである。はじめのころ、私たちがしきりに言っていたのは、ものを書くというのは、無償の行為以外のなものでもないということである。

これまで、参加の主な人をあげると、高橋松夫、由良喬、石川邦夫、いけだみのる、岩佐利彦、三竹徹也、下林益夫、中村英雄、高瀬美代子、成清良孝、三谷博俊など、ほかに

も今では、消息の知れない人たちもいる。最近は一、二回発行で、昨年十二月、一〇八号を刊行したが、現在、同人は、岡島春枝、小沢正義、河村延久、鈴木亮一、花村守隆、市尾卓の六人……。半世紀以上の歳月を経て、かけがえのない同人をあいっついで鬼籍に送り、新たに加入の方があれば歓迎したいと思っている。

五十年を超える同人雑誌経験から、流通するおびただしい作品のなかには、作者の個性に親炙して懐かしく、感応の悦びに浸ったのを想いだす作品も少なくない。それが、時代や社会環境の変化とともに、近ごろ流通の作品は、著しく変質して、興味の持てない、縁のない作品がふえてきた。一方、かつて、前記のように感応の悦びを得て、相応な関心を抱いて読んだ作品が、現在、読みかえしてさほどの



魅力を感じなくなっているのに、しばしば戸惑うのである。作品のいのちということだが、これも時代環境や当方の感受性の変わりように問題があるのだろうか。かつての作品が、どこか魅力を失って興をよばなくなっているのは、否定のしようもない。ちかごろ、折にふれて気づくことである。時差を置かず、繰り返して読むことをしない、気ままな読者の当方に、その責めがあるのだろうか。

川端康成の「月下の門」昭和二十七年／一九五二新潮）に、つぎのような文言がある。

「永遠の文学などというものは、もう作れない時代がきたかとも疑える。私は、あまり読んでいないけれども、近ごろの翻訳される小説もそうなのではないか。書かれた時にしか、その短い時にしか生きて感じられないようなのが、今は小説の一つの傾きかとも疑える。嫌な疑いで、疑うことがすでに病弱であろう。しかし、時代の不安と分裂のせいもあるう」

この「書かれた時にしか、その短い時にしか、生きて感じられないようなのが、今は、小説の一つの傾きか」という言葉が、近ごろ、かつての作品を再読していて痛切に響くのである。



「季節風」同人

季節風同人会

〒一八五・〇〇〇三

東京都国分寺市戸倉三・九・七

市尾卓内 TEL〇四二・三三三三・五四〇五

## 黒い赤ちやん

波佐間義之

四階の産婦人科の入院室の少しばかり開いたカーテンの隙間から灰色の空が見えた。外は霧のような細かい雨が降っている。

入院室のベッド脇で朝食を終えると、益恵は入院衣を脱いで自分の服に着替え、持ってきた日用品などを詰め込んだポストンバッグを手に提げた。それから六人部屋の他の人たちに声をかけ、おぼつかない足取りで部屋を出た。すぐ先の渡り廊下を通る時、彼女はガラス越しに外に目を向ける。どうやら菜種梅雨のようだ。益恵は中央のナースセンターに立ち寄って世話になった看護婦たちに挨拶をすませると、沈鬱な面持ちでエレベーターに乗り込んだ。子供だけを残しての一時退院だった。

った。油症のせいで、少し無理すると益恵はこうしてけいれんに襲われることが度々あった。

タクシーが街の中を走り出すと、益恵はハンドバッグにしまい込んでいたハンカチを取り出して目に当てた。ハンカチは濡れている。

「お客さん、どげんしたとすな？」

タクシーの運転手は顔を前に向けたまま博多訛りで声をかけた。益恵の様子が気になったらしい。

「いえ、何でもありません……」

益恵は音を立てて鼻水をすすり上げると窓の方に顔を逸らした。信号が赤になってタクシーは停車した。彼女は窓ガラス越しに外に目を向けたが、歩道を横断している人の姿はぼやけてしか見えない。

「お客さん、もしかしたらあの油を食べたとじゃなかですか。ほら、カネミの油……」

運転手は首を後にねじり向けて言った。益恵は思わず運転手と目を合わせてしまった。むっつりしている人かとはかり思っていたら、そうでもないらしい。益恵はすぐさま顔を俯げ、再びハンカチで被ったけれども、青黒く変色した彼女の顔の皮膚は運転手にまともに見られてしまったにちがいない。青黒いだけではなく、彼女の場合はたくさんの目ヤニが目蓋にこびり付いている。いくら拭いても目ヤニは取れないのだ。いや、取れるのだけれども、またす

病院の玄関先ではエンジンをかけたまま客待ちしているタクシーが何台かいた。益恵はその先頭の、開いた後部下アからポストンバッグを入れ、自分は座席に倒れ込むようにして乗り込んだ。バスもあるのだが、構外にある停留所まで歩くことがためられた。

タクシーのフロントガラスは微かに濡れていた。タクシーの運転手は益恵に行先を聞いてからフロントガラスのワイパーを五秒間ほど動かし、発進させた。彼女はシートに体を預けながらやおら顔をゆがめた。足がけいれんしている。重たいポストンバッグを持って歩いたせいだろう。ゴマ塩頭の運転手がルームミラーの中の彼女にチラッと目をやった。が、何も言わなかった。けいれんは間もなく治ま

ぐに出てくる。そのため、彼女の目蓋はいつも腫れぼったい。頬にはニキビ大の吹き出物が密集していた。彼女が黙っているとき、

「やっぱそうやったとすな」

油症被害者がこの大病院にきていることを運転手は知っていたらしい。

「いや、実は私のうちもあの油ば使いよったとすよ。米ぬかからとった油ということやから健康にもよかい触れ込みだったでっしょうが。覚えとんなさるな、あの山羊ひげ社長、あん人は血圧にもよかいいうて生のままで飲んで見せらっしゃったじゃなかですか」

そうだった。益恵が忘れるはずはなかった。福岡県を中心に西日本一帯に発覚した奇病の原因が「カネミライスオイル」であると究明された時、確かにあの山羊ひげ社長は自社製品をコップに注いでマスコミの前で一気飲みして見せたのだ。届け出た被害者はすでに一千人にのぼっていた。手足のしびれ、頭痛、めまい、倦怠に始まって皮膚全体の吹き出物、顔やツメの変色、けいれん、ひどくなると吐き気や歩行困難も伴った。

「今のところ私のうちは家族全員どうということはなかですばってん、心配したとすよ。それでもまあだ安心はできんて思いよります。いつ症状が現れるか分からんて言われとりますけん、ヒヤヒヤしとりますたい。……あの社



長、もしうちの油が原因ならば全財産ば投げ打ってでも被害者に補償する言うてマスコミの前で約束しましたでっしょよ」

「ええ……」

「中小企業の社長にしてはえろう肝っ玉が太かなあ思いよりましたばってん、実際はどげんですな？」

「何も」

「何も？ 治療費ぐらいは出してくれよでっしょよもん」  
「それもまだ……被害者の会の代表者が話し合っているらしいんですけど」

「治療費ぐらいはすぐ出してもらわんと困るでっしょよもん」

「そうなんです」

益恵はそう返事してから頭の中で五十万円あった預金通帳が病院通いですでにゼロになってしまったことを思い浮かべた。

「そうすな。そりゃあ……ぐらぐらこきますなあ」

タクシーの運転手はルームミラーの中で精いっぱい怒り顔を見せた。同情のつもりらしい。内心では自分の家族は免れてよかったと思っているにちがいない。益恵はそう思ってから慌てて自分の思いを否定した。このところ、自分はどうかしている、と戒めた。油症が意地汚くひねくれた感情を彼女に植え付けたのか。益恵は目を瞑り、片手で

眼窩を揉みしだきながら小さく息を吐いた。

益恵がそれらしい症状を訴え始めたのは、奇病発覚の二ヶ月ほど前の夏のことだった。彼女はその時妊娠していた。三ヶ月目だった。経理事務所に勤務する財津恵一と結婚して三年、やっと子供に恵まれた矢先のできごとだった。奇病の原因が米ぬか油に混入したPCB（ポリ塩化ビフェニール）という製油作業工程で使用されていた化学熱媒体物だと究明された時、益恵はほっと胸を撫で下ろしたものだ。原因が判れば必ず治療法も見つかる、と安易に考えていた。

ところが、近くの病院はもちろん、名医と評判のある病院をのべつ紹介されて行ったのだけれども、治療法はなかった。とうとう大病院にまで足を向けたのだが、そこでも効果のない薬をくれるばかりだった。治療に至らないばかりか、どこの病院からも治療費だけはしっかり請求された。PCBは熱を加えられることよってダイオキシン類という毒物に変化していて、それが体内に摂取され細胞内にある受容体というたんぱく質と結び付くと、どんな方法を用いても体外に排斥できず、そのことが原因で被害者の免疫低下や内分泌かく乱、発がんなどの複数の症状を与えることになるという。

夫の恵一にもやがて症状が表れ始めた。同じ食べ物を食

「どうする」

と恵一が箸を食卓の上に置きながら言った。食事も喉を通らないのは益恵も同じだった。二人の間に重苦しい空気が漂っている。何も映っていないテレビの画面から目を離れた益恵の顔が歪み、すすり泣く声に変わった。

「どうするって、もう八ヶ月よ」

涙声で恵一に向けられた。どうすることもできないことは恵一も知っているはずである。

「あの時、おろしておくべきだったな」

カネミ油症の疑いが濃厚になって大病院に検診に行った時、恵一はその時も同じことを益恵に言ったのを覚えている。あの時は夫の無神経さに腹が立って、益恵は周囲のことも考えずに辛辣な言葉を吐き散らしたが、今考えると夫の言うことは間違っていないのかもしれないと思っただ。しかし、あの時はとてもそういう気持ちにはなれなかった。産むことしか考えなかった。まさか子供にまで影響を及ぼすとは考えられなかったのだ。

「よくもそんなことが平気で言えるわね」

益恵の口から出てきた言葉はやはりあの時と同じように棘を含んでいた。男ってどうしてこうも無神経なんだろう。益恵の心の中を猛烈な勢いで感情の嵐が吹きすさび、体が震えた。

「もしも産まれてきた子供が黒い赤ちゃんやったらいよいよ

べているのだからそれは当然といえは当然のことだった。せめて恵一だけでも、と思っていた益恵の願いは絶たれた。恵一は足の甲に大きなコブができた。靴が履けなくなり、コブは痛みも伴って歩行困難に陥ってしまった。夫の勤務先である経理事務所はすぐ近くにあるのだが、そこまでも歩くことができなくなった。しばらくはタクシーで通勤していたのだが、タクシー代もバカにならず、収入は落ちた。事務所の方が気の毒がって仕事を事務所の車で自宅まで運んでくれるようになったが、益恵が手伝ってやって事務所でする時のようには捌けず、とうとう休職せざるを得なくなった。

そんなある日の夕方だった。

益恵はコタツに向き合って夫と食事をしながらテレビを観ている時、ショッキングなニュースが飛び込んだ。長崎県五島に住んでいるカネミ油症患者の妊婦から黒い赤ちゃんが産まれたというのである。赤ちゃんは死産だった。益恵も恵一も箸の動きを止めてその画面を食い入るように見つめていた。夫婦はしばらく口もきけなかった。テレビは黒い赤ちゃんとかネミ油症との因果関係を益恵も知っている。油症研究班のK大学教授のコメントを添えて細かく報じている。恵一がテレビのスイッチを切った。益恵は指に挟んでいた箸をポロリと落とす。益恵の瞳は凍りついてしまったように消えた画面をまだ見続けていた。

よ地獄だぞ。五島の方は死産だったから、まあ言い方は悪いが、ホンネは不幸中の幸いだったんじゃないだろうか」

その言葉も益恵の気持を逆なでした。

「じゃあ、私にどうしろって言うの。死んだ子供を産めと  
言うの」

下腹部辺りの消化器官を逆流するような感じで熱いものが押し上げてきた。

「ばか、今更どうしろこうしろと言うんじゃない。ただ  
……」

「ただ？」

「……もう仕方ない」

やはり益恵が墮胎に応じなかったことを根に持っているのだ。

長い沈黙の後、恵一はお茶を一口するとセーターを脱ぎ、畳の上に腹ばいになった。恵一の吹き出物は背中や臀部、それから精巢の周囲にまでできている。吹き出物を指で強く押すと血混じりの膿が出た。自分の手の届く範囲なら簡単につぶすことはできたが、背中にできたヤツは自分ではどうすることもできない。で、そいつを益恵につぶしてもらうために恵一はこうして腹ばいになるのだ。益恵は黙って鏡台に置いてあるちり紙に手を伸ばし、それから夫の背中の中のシャツをまくり上げた。吹き出物は無数にあった。どういいうわけか背中の中の吹き出物は益恵にはできていないの

だ。その分は胎児が被ったのか。恵一の背中が一番大きいのは梅干ほどに盛り上がりつつある。これまでいくつつぶしたことだろう。つぶしてもつぶしても、吹き出物は同じ場所にできた。場所を変えて出来る場合もあった。つぶすのがいいのかどうかは分からない。親指と親指に力を込めて吹き出物を挟むようにして押すと、にゅるにゅると膿が出た。膿は微かに古くなった油のような臭いがするらしいが、益恵には何も感じなかった。もしかしたら彼女の嗅覚は狂ってしまっているのか。押し出した膿をちり紙でふき取ってまた押し出す。そのたび、恵一は痛みが走るらしく「ヒュー」とか「ウーッ」とか声を上げる。膿が出るとその部分に月面写真で見るクレーターのような穴が出来た。膿が溜まっていた時のような痛痒さはなくなるらしいが、それもその時だけ。瘡蓋ができて、その下に膿が溜まるとまた痛痒さがよみがえる。イタチごっこだ。いつだったか、恵一はカッターナイフでその吹き出物を抉り取ってくれと益恵に言ったことがある。本気だった。煩わしい気持ちは分かるが、そんなことで吹き出物が治るならそうしてやりたい。しかし、そうしていたら命がもたない。皮膚全部を切り裂くことになるのではないか。もしかしたらあの時の恵一はそれでも構わないと思って言ったのかもしれない。益恵には恵一の気持ちは分かり過ぎるほどよく分かるのだ。夫の気持ちそのものが益恵の気持ちなんだから。

電話が鳴った。益恵は恵一から離れて受話器をとる。ノドに痰の絡んだような義母の声が聞こえた。義母はすぐ近くに住んでいる。義母たちも油症被害者だった。実を言えば義母がああ油をくれたのだった。よか油が手に入ったから、と義母はこうして電話をかけてきたのだ。義母の説明によると、米ぬかから搾りとった健康食品ということだった。義母たちは炭坑社宅に住んでいた。炭坑はもう潰れてしまつて現実には存在しないが、長屋の社宅だけはまだ元の姿で残っていた。すでに退去期限は切れている。社宅は取り壊してどこそこの企業に土地を売る算段にしているらしいが、従業員だった義父たちは、約束の退職金をまだ手にしていないのだから、そう易々と立ち退くわけにはいかない。もしも約束が果たせないような場合には社宅を肩代わりとして譲り受けるつもりなのだ。誰とでも分け隔てなく付き合える炭坑社宅の人たちの結束は堅く、倒産会社がいくらうまい話を持ち込んで立ち退きを迫っても、首を縦に振る者はいなかった。

そんなある日、カネミはこの炭坑社宅の集会所で料理教室を開いた。講師はもちろんカネミが依頼した料理家である。講師がカネミの油を使って調理して見せたのは言うまでもない。天ぷらを試食させ、カネミの油がいかにおいしいかを集まった人たちに納得させ、その後、一斗缶（一八リットル）入りの米ぬか油をトラックの荷台に何缶も積み

上げてやつて来ては定価の二割安で油を買わせた。おいしい、という評判が評判を生み、そして義母も余分に買ったものを益恵に分けてやったのである。まさかその食油にPCBが混入していたなど誰が知り得ただろう。いや、もしかしたらカネミの従業員の一人ぐらいは知っていたかもしれない。なぜなら、ダーク油事件が食油事件の前に発覚していたのだ。ダーク油とは食油を作る過程でできる、いわば絞り粕のこと。これが飼料会社に売られ、トウモロコシなどと配合され、この飼料を食べた鶏が西日本一帯で百五十万羽死亡している。この時に予見出来たはずなのにカネミは食油を回収するどころか、商魂たくましくこうして移動販売までやってのけたのだ。当時の農林省も厚生省も責任のなすり合いこそすれ、実態解明に乗り出そうとはしなかった。

「どげんしとるね」

義母はいつも方言だ。義母だけではなく炭坑社宅に住んでいる人たちはみんな義母と同じようにめつたなことは標準語は使わない。

「どげんもこげんもなかです」

益恵もつい方言になってしまふ。どうすることもできない状態、と益恵は言う他はなかった。お義母さんからの油さえもらわなかったら、とは言えなかった。事実、あの油さえ口にしなければ、貧しいながらも夢と希望にあふ

れた日々を恵一と共に暮らしていたはずである。いや、批難されるべくはカネミなのだ。益恵は慌てて思いなおした。義母も義父もそれから義妹も益恵たちと同じ被害者だった。益恵たちの人生を奪ったのはカネミなのだ。恵一がセーターを着込みながら、誰からか？ と小さい声で聞いている。益恵はちよつとだけ受話器を手で塞いで、お義母さん、と応える。

「そげんたい、うちも。毎日毎日とうちゃんど歯痒か思ひばしとる。このままじゃすまされんばい。とうちゃんはその山羊ひげ社長と刺し違えてもよか言うて裏の山から竹切つてきては何本も槍ば作りよんなさるとよ。そげな物で殺せるもんかい言うても聞く耳ば持たつしゃれん。もう五十本ばかり作つとんなさる。ちいつと頭もおかしゅうなつとんなさるごたる。うちらにも竹槍持たせて一揆でも起すつもりらしか」

「みんなそげん気持ちですくさ」

「うん、あんたたちにも迷惑かけてしもうて……ほんなごと、悪かつち思うとるよ」

義母もやはりあのことを気にしているのだ。

「お義母さんのせいじゃなかつた。こんなことが分かつていれば私の方から断つていますよ。悪かとはカネミですけん」

「うん、被害者の会の会長さんも言よらしたが、交渉にも出て来るのはいつも弁護士と下つ端役員ばかりで、山羊ひげ社

だ、と益恵は肩を震わせた。恵一はすぐ電話を切つたようだった。

益恵の目の前が急に暗くなり、膝から崩れ落ちてしまったのはその直後だった。水道の蛇口は開きっぱなしだった。意識はあつた。気配を感じて恵一が慌てて台所にやって来た。

「おい、どうしたんだ？」

「お腹が痛い！」

益恵は呻きながら言った。恵一は益恵を抱きかかえるようにして居間に戻ると布団を敷き、益恵を寝かせた。陣痛にしては早過ぎる。しかし、痛みは治まるどころか間歇的に彼女を襲った。もしかしたら早産かもしれない。益恵は恵一に救急車を呼んでくれるように言った。恵一が電話をして五分も経たないうちに救急車は家のすぐ横まで来た。近くの行きつけの産婦人科に運んでもらったのだけれども、益恵が油症患者であることから簡単な応急処置の後、そこから六十キロほど離れたK大学病院に運ばれることになった。その間、益恵は付き添いの恵一の手を握り締めながら目を閉じていた。

救急車は小一時間かかってK大学病院に着いた。

病院に着くと益恵は連絡を受けて居残っていた担当医師の診察を受けた後、すぐに分娩室に入れられた。益恵は顔を歪め、歯を食い縛っていた。想像以上の痛みが益恵の下

長はいつちよん出て来んらしか。全財産ば投げうつてでん被害者の救済に当たるとか言うたのは何やつたとかいな」

義母はそれから恵一に代つてくれるように言った。受話器を耳にした恵一はいつもだと「うん」とか「いや」とか短い言葉しか吐かないのに、この日はかりはのつけから大声で「今更そんなことができるもんか」と怒鳴り声を上げたので、夕食の後片付けを始めた益恵は思わず食器を取り落としてしまった。

慌てて食器を拾い上げた益恵と恵一の目が合った。

恵一はこれまで見せたこともないような悲壯感を顔面に漂わせていた。益恵は直感した。義母はきつと産まれてくる子供のことを言ったのにちがいない、と。やはり五島の黒い赤ちゃんのテレビニュースを観たのだろう。益恵に言えないことを義母は息子に言つて伝言させるつもりだったのか。益恵は何食わぬ顔を繕つて台所に立つたが、恵一の言葉は彼女の胸に鋭い刃物となつて突き刺さつていた。今更そんなことができるもんか。お腹の子供を処分しろ、と言つたのにちがいない。それからこうも言つたにちがいない。五島のような子供が生きて産まれてきたら一家がこれ以上に辱めを受けるだけだ、とか、見世物になるだけだ、とか。はたまたこうも言つたかもしれない。今すぐ離婚しろ、と。まさかとは思うけれど、もしもそうだとしたら、酷いお義母さん、まるで嫁が悪いことでもしたみたい

腹部を襲つていた。初めての経験である。すでに破水していたらしい。益恵は看護婦から後で聞かされた。自分ではよく分からなかつたが、ストレッチャで運ばれる時、太股の辺りに生ぬるいものを感じたのがそれだった。

不安と恐怖の中で分娩台に跨り、果たして益恵の体内から取り出された胎児は一八〇〇グラムの女の未熟児で、五島の被害者から生まれた胎児と同じように黒い赤ちゃん、いわゆるコーラベビーだった。五島の被害者と違っているのは死産でなかつたことだ。益恵には「未熟児だが元氣な女の子」であること以外は知らされなかつた。が、看護婦や恵一の態度や様子から益恵には大方のことは分かっていた。女としての重大な仕事を終えたという充実感などはなく、益恵の胸にあるものはいえれば絶望的にどす黒く打ち沈んだ気持と疲労だった。

翌日のテレビや新聞はこのことを大きく報道した。益恵は後で知らされた。分娩直後、この大学病院で記者会見が行なわれたらしかつた。油症研究班の一員でもある主治医と一緒に恵一も同席し、治療法もない現在の苦しみ、仕事も休職中で収入が大幅に減つたことによる経済的な生活の不安、(胎児の)将来の事などについて述べたと言う。

益恵が保育器に入れられた我が子を初めて目にしたのは産まれて三日目だった。恵一は産まれてすぐに対面していたらしいが、益恵はなぜか対面するのが恐かつた。看護婦



から誘いかけられても、体調不良を理由にしばらく延期させてもらっていた。母親がいつまでも産まれたばかりの我が子に對面しないというのは、たとえ保育器に入っているとしても怪訝に思われるのは当然であろう。本当は一刻も早く對面したいのになぜか気持ちに彼女をそうさせなかった。あれほど恵一から墮胎をすすめられても産むと決意したにもかかわらず、なぜだ。母親からも祝福どころか見放されて産まれてきたということを知ったら、あの子はどうなる。黒い赤ちゃんと産まれてきたことはあの子の責任ではないはずだ。あの子を守ってやれるのは誰でもない、母親のこの自分ではないか。どこからかそんな言葉が聞こえてきて益恵は自分の頬を両手で打った。

益恵はよく肥えた年増の看護婦に案内されて無菌室の前で白衣とマスクを着けて室内に入った。室内にはいくつかの保育器が置かれていた。益恵の心臓はさきほどから激しく動悸をうっていた。我が子との對面がこうも彼女を興奮させるのだろうか。息苦しさを感じた。看護婦に教えられて立ち止まった保育器の中の小さな命の塊に目が触れた時、益恵は思わず込み上げてきた大粒の熱い雫をどうすることもできなかつた。小さな命の塊は薄く目を閉じ、両手の平をしつかりと握り締めてすやすやと眠っているように見えた。本来ならまだこうして母体にいなければいけないなかつた。二ヶ月も早く出てきたのだ。小さな命の塊は確か

ろう。

駅には恵一が迎えに来るようになっていた。が、見当たらない。筑豊線のディーゼルカーは事故か何かで遅れているのかもしれない。あるいは本人が乗り遅れたのか。

益恵は人込みに顔を隠すようにして待合室に入った。見知らぬ目がじろじろと無遠慮に益恵の顔を盗み見た。いや、そうではないかもしれないが、彼女の目にはそう映った。

待合室の隅つこの空いた椅子にちょこんと腰掛けると、益恵はハンドバッグを開いて化粧鏡を取り出した。化粧をすることもなく、もう鏡は見ないつもりでいたのだが、やはり自分の顔が気になった。たくさんの人が集まるころに行けば余計そんな気になってしまう。見れば見るほど自分の顔が醜くなるのが分かっていながらも、鏡を捨てきれないでいた。もしかしたらある日突然に元の顔に戻っているのではないか、という期待も心のどこかに潜んでいないわけでもなかつた。もちろんそんなことが起りうるはずもないということも百も承知の上で。益恵は周囲を気にしながらそつと覗く。鏡の中の自分の顔立ちには端整な部類に入りそうだが、皮膚はといえば相変わらず吹き出物に被われ、浅黒く変色し、さながらガマ蛙を見るような気がした。益恵はすぐ鏡を閉じた。

母親だろう大人に手を引かれてよちよちと歩いて行く子

に赤黒い皮膚をしていた。色素の沈着でそうなったらしいが、マスクミが「黒い赤ちゃん」と騒ぐほどの大げさな色ではなかつたことに益恵はほんの少しだが安心した。

「名前はもうお考えですか？」

看護婦が益恵を振り向いてマスク越しに尋ねた。

「ええ、幸恵と決めています」

五ヶ月目に入った時だっと思う。行きつけの産婦人科の先生から女の子だと教えられ、恵一と決めたのだ。子供には「幸」せになってもらいたいという願いと、恵一と益恵に共通する「恵」を取って名前は「幸恵」にしよう、と。そのことを益恵は看護婦に説明した。

「あら、財津幸恵ちゃん、可愛い名前。ほら、幸恵ちゃん、お母さんですよ」

看護婦が保育器に呼びかけた。幸恵がころなしに唇を動かしたような気がし、益恵は再び涙ぐんだ。

タクシーは博多駅の正面玄関に着いた。幸恵を大学病院の保育器の中に残したままなのが唯一気がかりだった。未熟児だから仕方ないが、できれば幸恵を連れて退院したかった。大学は幸恵を研究材料にするつもりなのだろう。五島では死産だっただけに幸恵は研究者にとってはまたとない好材料と考えているのかもしれないなかつた。もしも幸恵が未熟児でなかつたら、大学病院に残したりはしなかつただ

供が益恵の目に入った。赤い毛糸の帽子を目深に被っている。たぶん女の子であろうか。もぎたてのリンゴのような艶やかな頬つべたをしている。子供はよそ見しながら歩いている。そのよそ見していた目が益恵の目と合った。絵に描いたようにきれいに澄みきった丸い目だ。その両目がやおろそましいものでも見せ付けられたように怯え、凍りついたのが益恵にも分かった。益恵は思わず顔を伏せた。次に顔を上げた時にはもう子供の姿は見えなかつた。

待合室にいるどの顔も幸福に満ち溢れたように益恵の眼には映った。自分ほど不幸を背負っているような者はいないような気がしてならなかつた。いや、いるかもしれないが彼女の目にはそうとしか映らなかつた。もう口癖のようになっていたが、あの油さえ口にしなかつたらきつと自分もそうだっただろう、と益恵は齒軋りする。その遺伝子を受け継いで産まれてきた幸恵のことを思うと、彼女は二重にいたたまれない気持ちになった。あの時、益恵はなぜ墮胎を拒んでしまったのか。こういう結果が予測されないことではなかつただけにもつと冷静になるべきだった、と益恵は後悔する。病院にいる時、あの子と一緒に死のうか、と思ひ悩んだ。不幸になると分かっているながら産むことを選んだ自分が悔やまれて仕方なかつたのだ。カネミ油症の原因が食油製造過程における熱媒体として用いられたPCBであると究明された時、すぐにも治療法が見つかるにち

がないという安易な考えが彼女のどこかにあったのは確かだ。彼女だけではなく、大方の被害者がそう思っていたにちがいない。国立大病院では国の要請を受けて油症治療研究班も編成されたことだし、これだけ科学が進歩しているのだから後は時間の問題だと高をくくっていた。

ところが、益恵らの困惑とは裏腹に治療法の研究は一向に進展しなかった。被害者はモルモットでしかなく、一縷の望みも絶たれてしまった。

あの子が大きくなって自我に目覚め、自分の体の異常を知った時、親に向かってどんな言葉を投げつけるだろうか。きつとこう抗議するにちがいない。どうして産んでくれたの、誰が産んでくれと頼んだの、と。あるいはこうも泣き喚くかもしれない。不幸な星の下に産まれたくはなかったわ、と。

益恵の周囲にいる人たちにカネミ油症事件はどう映っているのか。確かに大きな社会問題にはなっているが、それはあくまでもマスコミの世界であって、現実にはどの顔も自分たちでなくてよかったと他人事のように思っているのにちがいがなかった。もし益恵が口にしていなければ誰かがPCB入りの食油を口にしたはずである。すぐ目の前を行くウグイス色のネクタイをした紳士か、あるいは真珠のネックレスを見せびらかしてそそくさと歩く婦人だったかもしれない。若さの特権を思う存分に行使している隣の

ないのだ。産んだ子に母乳を与えられないなんて、なんと情けなく嘆かわしいことか。益恵はこの不条理を呪った。

「遅くなってごめんさい」

益恵の背後から声がした。弾かれたように益恵は胸に差し込んでいた手を引き抜いた。後ろに立っているのは恵一ではなく、義妹の美穂だった。美穂は丸い顔に屈託のない笑顔を浮かべていた。

「あら、恵一さんは？」

「それが歩けなくなったのよ」

「え！」

「足のコブが痛むらしいの」

だからお前行ってくられて兄から電話があったのだと美穂は言う。美穂も同じ被害者なのだ。首の辺りにはマフラ一を二重に巻いているし、外見からは症状は見えなかった。しかし、見えない部分には益恵とおなじような症状がいくつも出ているはずだ。地元の高校を卒業してからずっと近くの本屋の店員として働いている。その日は有給で休んだということだった。

「そうだったの」

それで遅くなったわけだ。益恵は美穂に礼を述べてゆくりと椅子から立ち上がった。ポストンバッグは美穂が持った。

「義姉さん、一人で歩ける？」

アベックかもしれない。たまたま益恵たちが口にしただけ

のことである。誰が被害者になっても不思議ではない。しかし、人間はどうして他人のことになると無関心でいられるのか。自分には降りかかってこないとしても信じているのか。まるで被害者を蔑視するような素振りさえ感じられた。この苦痛、この哀しみを誰にぶつけたらいいのか。

考えれば考えるほど、益恵の心は歪んでくる。生きる権利を奪われたら人間誰しもこういう粗野な気持ちになるのだろうか。益恵は思った。水俣病やイタイイタイ病、四日市ゼンソクの被害者も自分と同じ気持ちなのだろうか、と。

益恵は目ヤニをチリ紙で拭き取った。目ヤニはべたべたと糊のような粘着力を持っている。一時間か二時間おきにそうして拭わなければ目ヤニが溜まる。ほつたらかしておくと、目蓋に付着して目が開けられなくなるのだ。ついで彼女は残りのチリ紙をコートの襟元から胸に差し込んで乳首にあてがった。先ほどから乳房が張ってきて、乳首から液がこぼれているような気がしていた。案の定、肌着は濡れていた。本来なら幸恵が吸わぶりついたはずなのであった。しかし、授乳はできない。保育器に入っているという理由からではない。油症被害者の母乳にはPCBが多く含まれているのだ。だから飲ませてはならないと医者から言われている。入院中から全部捨てている。母乳の出の少ない人から見ればもったいないと思うかもしれないが、仕方

おぼつかない足取りの益恵を義妹が気遣う。

「うん、少し疲れているだけ」

そうは言ったものの、益恵は少し眩暈を感じた。

「どこか喫茶店にでも入って少し休みましょうか。一便乗り遅れても構わないわよ」

美穂は益恵の背中にそっと空いた方の手を回した。

「大丈夫、美穂さんにまで心配かけて、ごめんね」

「そんなことないわよ」

美穂は幸恵のことについては何も聞かなかった。益恵を気遣ってのことだろう。あるいはテレビや新聞で報道されているので改めて聞く必要もないと思っただけにしないのか。それとも恵一が口止めしているのか。益恵にしてみれば義妹のそういう心遣いが益恵にはいじらしく思われた。しかし、いつまでも口を閉ざしているわけにもいかない。美穂はこちらから口火を切ってくれることを待っているのかもしれない、と益恵は思った。

外は本降りになっていらく、駅へ入って来る人たちの下げた傘から雫が滴り落ちていた。

二人は筑豊線ホームの階段をゆくりと上った。

ホームに立つと周囲は薄暗くなっていて、ひどい雨に見舞われていた。

「こんな雨になるとは思わなかったわ」

美穂は傘を持って来なかったことを気にしている様子だ

った。

まもなく四輪連結のディーゼルカーが入って来た。

乗客はあまりいなかった。益恵は二人掛けの座席に着くなり、横に坐っている美穂の丸い顔に目を注いだ。濃い目の化粧で吹き出物を隠しているが、ところどころ黒ずんでいる。黒ずんだところが吹き出物の出来ている場所だ。やがて彼女も益恵と同じように顔面いっぱい吹き出物が拡がってくるのにちがいない。明るく振舞っているが、内心は相当落ち込んでいるはずだ。長年付き合ってきた恋人とも疎遠になっていられない。油症が原因であることを疑う余地はない。すでに美穂は結婚はあきらめているようだ。

「聞いたと思うけど……女の子よ」

益恵は小さく口を開いた。自分から言い出さなければ美穂はいつまでも益恵を慮って聞きたくても口をつぐんでいるにちがいなかった。益恵が口にしたことで美穂はほっとしたように頬を緩め、「そうだってねえ」と語尾を上げて明るく応えた。「おめでとー」とは言わなかった。本来なら祝福される場面であるはずなのに。もちろん美穂のそうした態度に益恵が不快感を持ったのでは決してない。お互いにそういう気持ちになれないことはよく分かっていた。「名前はね、幸福の〈幸〉に恵一さんと私の〈恵〉をとって〈幸恵〉、と名付けることにしているのよ」

益恵は自分の手の平に漢字を書いて見せた。

「あ、それっていい名前」

私、幸恵ちゃんの叔母さんになるのよね、と美穂はすっかり紫色に変色した菌茎を見せて笑った。益恵も眉の辺りをいくらかひそめるようにして表情の乏しい笑顔を浮かべたが、心の中は鉛を呑み込んだように重たく沈んでいた。しかし、それではいけないと思直した。幸恵に対して申しわけない気持ち彼女が彼女の心を激しく揺さぶった。幸恵の誕生を母親の益恵まで祝福してやれないでは余りにも酷い話ではないか。幸恵は産まれながらに不幸を背負って生じたけれども、かけがえのない命であることに変わりはないはずだ。黒い赤ちゃんとして世間の目にさらされて一番憤りを感じているのは幸恵本人ではなからうか。本人にそうした知能がない今はただ黙然と眠っているに過ぎない。世間からこの子を守って上げることがするのは自分置いて他に誰がいる！ 益恵は現実から逃れようとしている自分を激しく叱咤した。

定刻になってディーゼルカーは発車した。

「義姉さん、質問してもいいですか」

ディーゼルカーが街中を抜け、車窓に田園風景が拡がり出したところで美穂が急にそんなことを言い出した。

「なあに？」

「義姉さんは死ということを考えたことがありますか」

声は細いが美穂は気が触れたのではないかと思えるほど

真剣な眼差しで益恵を凝視した。美穂のそういう真剣な顔はこれまで見たこともなかった。益恵は一瞬言葉に詰まって無意識のうちに拳で胸を叩いていた。死、死、死……。考えたことがあるのではない。カネミ油症になってからは毎日が生と死の狭間で葛藤を繰り返して来たのだ。辛うじて死の世界へ足を踏み外さなかったに過ぎない。益恵にとって死はもう特別なことではないのだ。いつでも手の届くところにあった。

「そうね、考えたことないと言えば嘘になるわね」

益恵は思っていることの半分以上を呑み込んでいた。

「義姉さん、私、最近もう生きるのがイヤになる時があるの」

聞き返さなければならぬほど細い声だが、益恵は周囲を気にして辺りを見回した。すぐ近くに若い女性が三人ばかりいたが、三人は自分たちの話にならなっており、その他にも美穂と益恵の話に耳を傾けていそうな人はいなかったので安心した。それにしても、義妹までがそんなことを考えているとは意外な気がした。いや、それはちがっている。美穂が死を考えているとしても不思議ではない。他人の苦しみや哀しみ、辛さや怒りは外見では分からないことの方が多し。益恵には美穂の内面は手に取るように理解できた。それはそっくり益恵の内面なのだ。だからと言って、美穂の言葉に同情していいものかどうか、益恵は戸惑

った。カネミ油症と認定され、治療法もなく生きていくことにどんな意義があると言うのか。意義はなくともいい。どんな将来が待っていると言うのか。こうして苦しみもがいている間でも食べないわけにはいかない。まともに働けなくなり、収入もガタ減りしてしまっただけ、どうして生きていくことができるのか。多くの油症被害者はどん底に突き落とされた。国も地方も被害者の声だけは聞いてくれるけれども、具体的な話に及ぶとすると逃げた。それはカネミに言いなさい、と。それはそうかもしれない。しかし、カネミは「全財産を投げうってでも補償する」から「ない袖は振れない」に変更してしまっている。これがその場しのぎの言葉遊びだとしたら、被害者を愚弄するにもほどがある。加害者であるはずのカネミは設備を新たにして以前と同じような営業活動を行なっている。では被害者はといえば「やられ損」で葬られようとしている。この矛盾を許せるか。自分らが死ぬということはそれらを許すことにならないか。「やられ損」で泣き寝入りすることにならないか。

「美穂さん、私だって生きるのがイヤになるわよ。でも、みんな必死で生きているのよ。幸恵だって何も分からないまま保育器の中で懸命に生きているのよね。私ね、今になつてすっかり生きていかなければならぬって気持ちになったの。死んだら負けよ。そりゃあ本人はそれでチョンだ



からいいかもしれないけれど、死んだつもりで生きること  
もとっても重要な気がしてきたの。私ね、これからは幸恵  
のためにも自分自身と闘っていかねければと考えているの。  
生きることはカネミと闘うことにもなるのよね」

「それは分かるんだけど、そうまでして生きる必要があるの  
かしら。私たちの前にあるのは絶望だけじゃないの。社会  
からは疎外されているし、人生を返してくれて叫んでも  
リセットできるわけでもないし、このまま苦しみ続けて生  
涯を終らなければならないのかと思うとやりきれないじゃ  
ないの。治療法だってもうアテにはならないし」

「そうね、それは確かだけど……」

益恵は言葉に詰まった。美穂の言っていることは今まで  
の益恵の胸に巣くっていた言葉である。幸恵の存在が少な  
からず益恵の心を変えようとしている。そのことをどう説  
明したら美穂に理解してもらえるだろうか。

疲れも伴って二人は無口になった。

ディーゼルカーは新飯塚駅に着いた。二人はそこで下車  
し、後藤寺線に乗換え、更に田川後藤寺駅で下車、それか  
ら日田彦山線下りに乗り継いだ。

列車の窓から英彦山が見えた。三月とはいえ標高  
一二〇〇メートルの頂上付近は白く塗り込められている。

下界は雨でも山の上は雪らしい。

益恵は三年前の花嫁姿の自分を思い出していた。あの日

って益恵は義妹の名前を呼んだ。美穂が振り向いた。その  
顔はいつもと変わりなく笑っていた。

「またね！」

叫んだ益恵の声に美穂は軽く手を振った。益恵は安心し  
た。

道はところどころ泥濘ぬかるみになっている。普段なら五分で歩  
けるところを十分ほどかけて自宅にたどり着いた。玄関の  
表札が裏返しになっていることに益恵はすぐ気付いた。マ  
スコミの訪問を嫌って恵一がそうしたのだろう。

玄関の鍵は閉じられている。

「ただいま」

返事はなかった。益恵は合鍵で開けて中に入った。居間  
にしている隣の部屋からテレビのCMコマーシャルが聞こえた。テレビ  
を点けっ放しでどこか出かけたのだろうか。そう思って部  
屋に上がり込むと、テレビの音量が急に小さくなった。

「あら、いたの！」

「おお、帰ったか」

深く暗い沼の底から浮かび上がったような恵一の顔が、  
少し開いている襖の隙間から覗いた。何日か見ないうちに  
恵一の顔は確かに黒ずんでいた。特に耳たぶに浅黒い吹き  
出物が目立つようになっていた。目がしょぼくれているの  
は寝ていたからだろう。彼はコタツから上半身を起き上が  
らせた。益恵はポストンバッグをその横に置き、自分もコ

も英彦山の頂上には雪がうっすらと積んでいた。恵一とは  
恋愛の末に結ばれた。建設会社の事務員をしていた益恵の  
ところに仕事でやって来た恵一と言葉を交わしたのが最初  
の出会いであった。二人の結婚は多くの友人や親戚の人に  
祝福され、新婚生活は幸福の日々だった。それが三年も経  
たないうちに幸福の絶頂からどん底に引きずり下ろされる  
ことになることは想像もしなかった。自分の責任でそうな  
ったのであれば納得もできる。だが、あの油は栄養満点、  
美容にいい、高血圧にもいい、皇后陛下も使っておられ  
る、と義母に言わしめるほどの高品質の食用油のはずなの  
であった。義母が嘘を言ったのではない。カネミの米ぬか油  
を運んで来た販売員の宣伝文句は誰もが耳にしている。販  
売員だって騙して購買意欲をそそったわけでもあるまい。  
こんなことが日常茶飯で起るとしたら一体何を信じて食べ  
たらいいのか。いや、何も信じられなくなる。

益恵と美穂は添田駅で降りた。改札口を出ると雨は止ん  
でいた。かつて黒ダイヤで栄えたこの町も今は寂れてしま  
っている。炭坑景気で賑わっていた頃の面影はもうどこに  
もない。

益恵は美穂と駅前で別れた。美穂のお陰で鬱屈していた  
気分が少しは晴れた気がした。美穂の方はどうだったか。

益恵は振り返って美穂に視線を送った。美穂は背中を見せ  
たまま小さくなっていく。その背中がこころなしか気にな

タツに足を入れて坐った。

「昨日、役場に行ってきた」

恵一は幸恵の出生届けを出しに行ってくれたのだ。

「あら、ありがとう」

「そうしたら帰りには歩けんことになってしまおうてな、今日

は美穂に電話して代わってもらうように頼んだんだ」

「美穂さんから聞いたわ。どう、足の痛み？」

「じつとすれば痛みは感じないんだが、歩けば痛い」

恵一はそう言って右足を益恵の方に差し出した。足の甲  
には梅干大の大きさのコブが二つに増えていた。

「マスコミが来たの？」

「ああ、あれから連日来るようになった。最初はまともに  
応じていたのだが、そのうち嫌らしくなって、居留守をつ  
かっている。あいつらはどうも俺たちの味方じゃないな。

正義の味方みたいな態度しているけど、興味本位でやって  
来ているんだよ。幸恵が退院して来たらひっきりなしにや  
って来るだろうな」

「それで玄関の鍵も閉じていたのね」

「うん。……どこかへ引越そうか」

「変わったってすぐ捜し出して来るわよ。それに、引越し  
のおカネもバカにならないわよ」

「そうか……」

「お昼、まだなんでしょう」

「ただだけど、食べたくない」  
「でも、食べないわけにはいかないわよ。インスタントラーメン作ってあげる」

「いや、おれはいい」  
こうなってしまうのはもう死んだ方がましだ、と恵一は吐き捨てるように言った。それからいつもの口癖を付け加えた。何もしてもらわなくてもいい、カネミの社長や従業員におれたちと同じPCB入りの油を食べさせたい、と。そうすればおれたちの気持ちに分かるだろう、と。それが唯一恵一の加害者に対する復讐だった。残酷な気持ちになるのは誰しも同じだった。こういう恵一にしたのは誰だ。

恵一の真つ当な心まで奪ったのは誰だ。益恵はそう叫んでみたかった。そうした恵一の残忍な言葉を耳にするたびに益恵の胸は苦しくなる。いっそのこともっと多量のPCBを入れてくれたらこんな苦しみとはなかっただろう。あの油を食べた瞬間、コロリと死んだ方がましだったのだ。苦しむ間もなく、怒る間もなく、悲嘆する間もなく、あつと言う叫び声だけ残してコロリと……。

だが、生きている。生きているから苦しみから逃れられない。どこまで苦しめばいいのか。これを運命と言うならこのあまりにも大きな運命の前に神や仏は役に立たないのか。

水俣の被害者は自分たちのことを生ける屍と言っていた

ラーメンを、恵一は一口すすった後、ため息をついて箸を置いた。益恵の食欲もほとんどなかった。古い沼に沈んだ朽木のようなこの生活はいつまで続くのだろうか。

義母から電話があつたのはその日の夕方だった。美穂が朝から家を出たまま帰らないと言う。受話器を耳にした益恵はええーっと、素つ頓狂な声を上げていた。そんなはずはない、と。益恵は添田駅まで一緒に帰って来たのだから信じられなかった。あれからどこに行つたのだろう。美穂からは何も聞いていなかった。添田駅で別れる時に義妹の後姿が何となく気になつて声をかけたのだったが、普段と変わった様子も感じられなかったし、まっすぐ家路に向かったものとはかり思っていた。

美穂が英彦山神社の杉林の中にうずくまっていたところを神社の人に発見されたのは翌朝だった。再び電話してきた義母の話によると、美穂は神社の人の世話で救急車の通る下の道まで長い階段を担ぎ降るされ、近くの病院に運ばれたらしく、彼女の体はかなり衰弱してはいるものの命に別状はない、と言うことだった。義母は「英彦山神社の神さんが助けてくれたんやろう」と話しては「バカたれが」と美穂のことを言い、受話器を持つ益恵の耳に何憚ることなくさめざめと泣き喚いた。美穂は死に場所を求めて彷徨っていたのだろうか。美穂のマフラーは手の届く高さの細

けれども、自分たちにもそっくりその言葉が当てはまるような気がしてならなかった。生ける屍はここにもいる。恵一も益恵も、そしてこの世に生を受けたばかりの幸恵もそう。しかしこれからどうなるにしても、やはり生きていくしかない。二十七年間の益恵の生命の根源を共有するも一人の益恵は、そう容易く死ぬことを選ばせてはくれない。それどころか、選択肢まで取り上げ、こう言うのだ。死ぬつもりで生きてみる、と。死ぬつもりなら恐いことは何もないはずだ、と。それからこうも言った。生きて怨念を晴らす気はないのか、と。

そうだ、生きて怨念を晴らさなければならぬ。晴らさなければ死ぬわけにはいかないじゃないか。化け物と言われようが何と言われようが、世間を気にするのはよそう。カネミ油症と認定されたガマさながらのイボイボだらけのこの顔を見よ、黒ずんだ皮膚を見る、腐食した体を見よ、黒い赤ちゃんとしてマスコミの餌食にされている我が子を見よ。人間の手によつて開発された、壊れない、変化しない、酸にもアルカリにも熱にも強いという都合のよい万能の物質が、なんと人間を侵している。油症被害者はまさに近未来社会の人体実験を強いられているのではないのか。

益恵は手際よく買い置きインスタントラーメンを作ると、鍋ごと卓上に置き、取り皿を二つ並べた。もちろん一つは恵一のものである。益恵がその皿に取つてくれた味噌

い杉の枝に垂れ下がっていたらしい。

義母との電話を終えると、益恵はいつの間にかじんわりと濡れてしまった乳房を両手で押さえた。と、これまでに感じたこともないほどの力が腹の底の方から湧き上がってくるのを覚えた。益恵は思う。弱気ではいけない、と。あの子も生きている。懸命に自らの命を育んでいる。今は生きる事が大事なのだ。あの子が教えてくれたではないか。そうだ、幸恵が保育器から離れられるようになったら、義母や美穂を伴つて家族ぐるみで英彦山神社にお宮参りしてみよう、と。

窓のカーテンを開くと、柔らかく慈愛に満ちた早春の陽射しが透明なガラス越しに益恵の体に降り注いだ。

（「九州文学」539号より転載）

# 九州文学

## 「文学賞」と「同人誌評」と良質の文学

### 福岡県

「九州文学」は、昭和十三年（一九三八年）九月に創刊され、紆余曲折を経て、二〇〇八年春、編集人・波佐間義之氏らによって、良質の文学を目指す第七期「九州文学」としてスタートし、今年で五年目を迎えた。

「文芸思潮」「全作家」「季刊文科」「三田文学」といった文芸誌や各新聞社の地方紙に「文学賞」や「同人誌評」が掲載されるのを楽しみにしている同人作家は多いと思う。

福岡県のひわきゆりこさん主催の「文芸同人誌案内」ホームページでは、各新聞社や各文芸誌の「同人誌評」が分かり易く一覧表で書かれていて楽しみに見て参考にしている人も多いと思う。ご尽力に感謝している。

作品自体よりも「文学賞」の「受賞作品批評」や「同人誌評」の方が面白いのは、芥川賞や直木賞の「受賞作品批評」と同じだ。

評論家の「批評」を読んで、その作品を読んでみようと  
思う時もある。

「文学賞」や「同人誌評」に一喜一憂し、それを目標に頑

### 波佐間義之

1942 福岡県生まれ はざま よしゆき  
73「深夜の形相」で第10回総評文学賞受賞  
同年「水上街の美学」で第12回新日本文学賞受賞  
76「ツンドラの街」で第8回新潮新人賞候補  
同年 北九州市民文化賞（文学部門）受賞  
2004「三角山で」で九州文学賞受賞  
09「どくだみ」で第3回まほろば賞優秀賞  
12「イエスの島」で銀華文学賞佳作  
著書『貌のない街の碑』（栄光出版社）『出発の周辺』（九州文学社）『鈍色の訴状』（あらし書店）  
第七期「九州文学」編集発行人



## 作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします  
**懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!**  
飯田章（群像新人賞）・八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）  
小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）  
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

#### 詩

1 篇 3 枚以内 3000 円  
エッセイ  
1 篇 5 枚以内 4000 円  
10 枚以内 5000 円

#### 小説

1 篇 20 枚まで 7000 円  
50 枚まで 10000 円  
100 枚まで 15000 円  
200 枚まで 20000 円

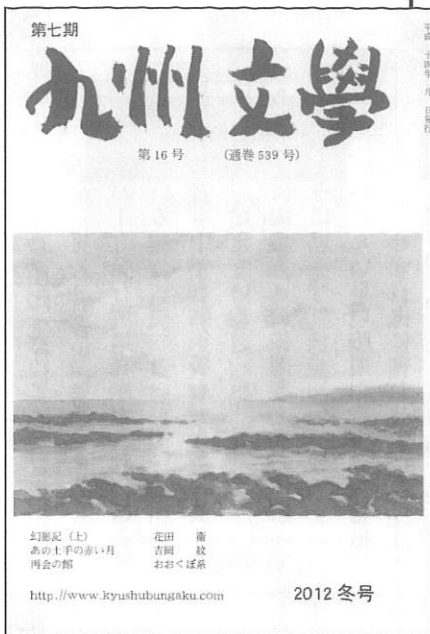
- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

### 作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp



張って書いている同人作家は多いと思う。「文学賞」「同人誌評」に取り上げられることは、全国の大勢の方に作品を読んで頂ける大きなチャンスでもあるからだ。

「九州文学」では、季刊文芸誌発行毎の三ヶ月に一回、合評会を開催している。

毎回三十五人前後の参加者が、福岡のホテルの会議室に全国から集合し、三時間みっちり合評するのだが、この際「文学賞」受賞者や「同人誌評」に掲載された同人の記事は、赤い線で囲んで必ず編集人が全員に配ってくれる。



当事者にとっては、大変名誉なことでも自信にも繋がり大きな励みにもなっていると思う。他の人にとってもいい刺激になり、次は自分が受賞し、紙面に掲載されたいという、前向きな気持ちになれる。

同人作家は、作品がどのように評論家に評価されているのか、とても気になるものだ。いい「批評」に出会った時はそれが他人の作品であってもほっとし、嬉しくなる。良質の文学は、ちゃんと評論家に理解されるのだと。

「文学賞」や「同人誌評」に選ばれるような良質の作品を書くことが、「九州文学」の目指しているところである。

発表の場が広がれば、受賞や批評の機会も増えるだろう。東京の文藝同人誌「文学街」主催者の森啓夫氏（前全国同人雑誌振興会会長）の呼びかけで、今年もまた九月に「文庫本（7）」（全国の同人作家競作で読者ハガキ投票の「読者賞」有り）を発行して下さることになった。「九州文学」からも九名が参加し新しい文学の流れに期待し、今から「読者賞」などの「文学賞」や批評家の「批評」を皆楽しみにしている。森啓夫氏のご尽力に大変感謝している。

一昨年の二〇一〇年十月、「九州文学」は「富士正晴全国同人雑誌賞」の「大賞」を受賞した。とても名誉なことだと思ふ。

その副賞のお陰で、昨年春には「九州文学」臨時増刊号

を出すことができた。年四回の季刊誌だけでは掘ききれない程の作品が集まり、本当に助けられた。とても感謝している。

また今年も北九州市の公益財団法人芳賀教育・文化振興会の教育・文化助成金を「九州文学」は前年に引き続き受賞し同人誌発行の為に役立たせて頂いている。光栄なことだ。

「九州文学」を一冊でも多く売ろうと地域の各有名本屋さんは、努力してくださっている。各新聞社や各文芸誌で「九州文学」が度々取り上げられたお陰で、本の売れ行きは順調だ。今年七月一日に発行した第十八号夏号（通巻五四一号）は、現在各有名書店に並べさせて頂いているが、バックナンバーも発行所に在庫があれば購入できる。皆様に感謝している。

会員数は、若者も中年も熟年層も、入会希望者が後を絶たず、既に百人を超えている。

これもひとえに編集人・波佐間義之氏の作家の才能を見抜く力にあるように思う。

誰も気付かないくらい早い時期から才能を見出し、同人作家の何一つも否定せず自由に書かせている。目利きの編集人がいることが、「九州文学」の強みであり、良い同人誌の第一条件だと思う。新人発掘は重要事項だ。編集人は編集するだけでなく、毎回の様に作品を発表

し、全国規模の「文学賞」にも応募し果敢に挑戦している。そんな編集人の背中を見て同人たちは尊敬し、「文学賞」へと努力し、何をアドバイスされても素直に受け入れ、どんな力がついてくるのだと思う。編集人の陰の無私の貢献に支えられて、編集委員以下同人一同、編集人を支えようとしている。こうして第七期「九州文学」は、復活を果たし、発展を続けているのだと思う。「九州文学」は、情報化の波に乗ると、昨年十月一日に「九州文学ホームページ」を立ち上げた。「九州文学」の目次や同人作家の出版本を掲載し、ゲストブックへの読者の書き込みで、感想も聞けるようになった。

インターネットの影響は予想外に大きく、ホームページ上で紹介された本は、すぐに本屋さんや図書館や編集発行所に問い合わせがあり話題になる。情報伝達の速さに驚いている。既に延べ一万三千人以上のアクセスがあり、文学の世界もインターネットなしでは考えられない時代なのだ。



合評会風景

と肌で感じている。

同人誌を取り巻く文学関係者や地域や個人の地道な努力が実を結んで、いつの日か全国に五百誌以上ある同人誌から、常に芥川賞や直木賞が出る時代が来て、お世話になった文学関係者や地域のみなさまにご恩返しが出来たらとても嬉しい。

福岡県の火野葦平氏、岩下俊作氏、劉寒吉氏、長谷健氏、原田種夫氏らによつて築きあげられた七十四年の輝かしい歴史と伝統のある「九州文学」の灯を消さないように良質の文学を目指して努力している。

（阿賀佐圭子「九州文学」編集委員）

九州文学

〒809・0028  
福岡県中間市弥生一丁目一〇・二五波佐間方  
TEL&FAX 093・244・8501